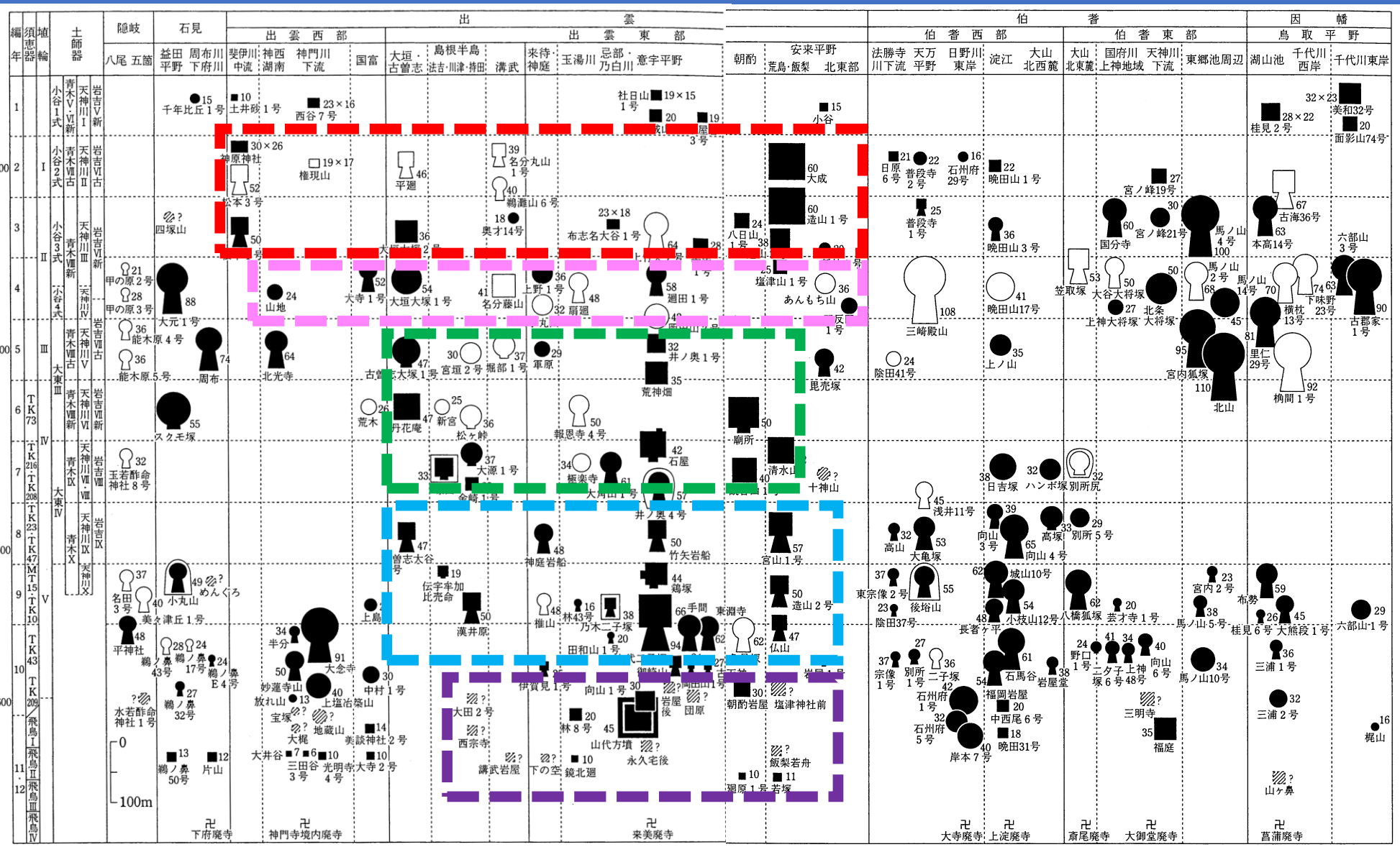
令和６年度しまねの古代文化連続講座
（東京）
2024年8月25日

山陰における
大型古墳築造開始の背景と意義
－出雲を中心に－

【本日の内容】
1．古墳時代出雲における首長墓の築造状況
2．出雲の古墳開始期をめぐる既往の理解
3．前期大型方墳の築造とその背景
4．山陰における前方後円墳の出現・展開
5．まとめ

岩本　崇（島根大学）

1．古墳時代出雲における首長墓の築造状況



山陰における首長墓の変遷［大谷晃二2011「山陰」『講座日本の考古学 古墳時代 上』青木書店］

●首長墓築造の展開

①古墳時代前期前半

大型方墳の築造

②古墳時代前期後半

前方後円墳の出現

③古墳時代中期

大型方墳の再登場

④古墳時代後期

前方後方墳の復活

⑤古墳時代終末期

方墳の卓越

①：３世紀の画期

②：４世紀の画期

2．出雲の古墳開始期をめぐる既往の理解

●**方墳の世界―山陰・出雲の特異性―**

①列島最大級の方墳の存在

②墳形としての方墳（方形原理墳）の卓越

≒前方後円墳（円形原理墳）導入の遅れ

cf.古墳時代の指標としての前方後円墳

［近藤1977・1983］

「前方後円墳体制論」［都出1989・1991］

などとの齟齬

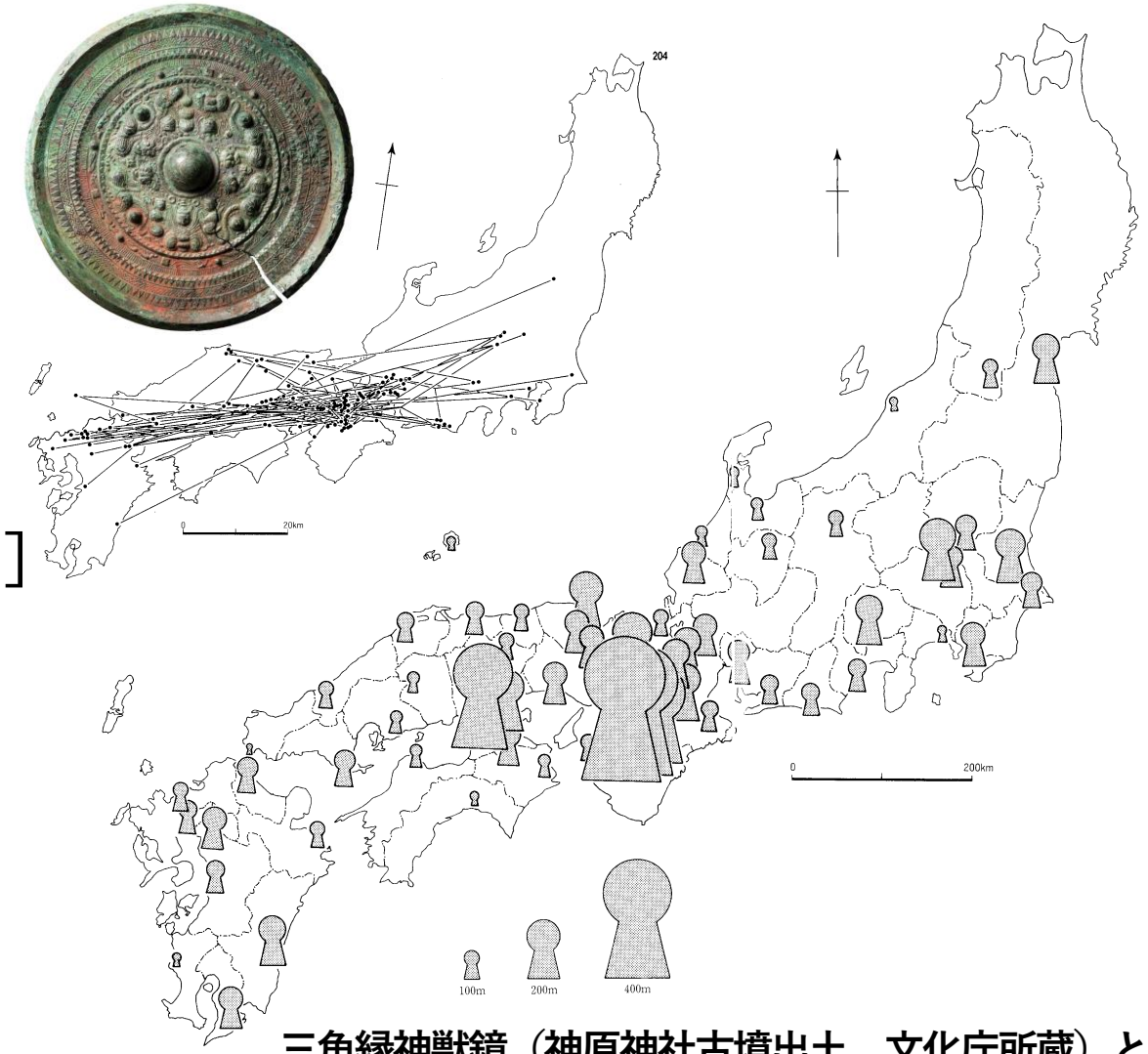
e.g.出雲における三角縁神獣鏡出土古墳は

いずれも方墳、「同笵鏡論」とは整合

出雲における三角縁神獣鏡は、

①列島最大級の方墳からも出土

→<u>①列島最大級の方墳の評価は、地域から王権を逆照射する重要な視座をもたらす</u>



三角縁神獣鏡（神原神社古墳出土、文化庁所蔵）と大型前方後円墳の分布にみる中心・周辺関係の形成

［新納　泉1989「王と王の交渉」『古墳時代の王と民衆』古代史復元６　講談社］

●既往の理解　大きく２つの考え方

①在地性重視

・「方墳＝在地的」とするパラダイム［山本1951］

・方墳＝在地的古墳↔畿内的古墳＝前方後円墳など
とする「発生期古墳」論［前島1973］
（在地的古墳には四隅突出型墳丘墓が含まれる
：弥生墳丘墓概念［近藤1977］の以前）

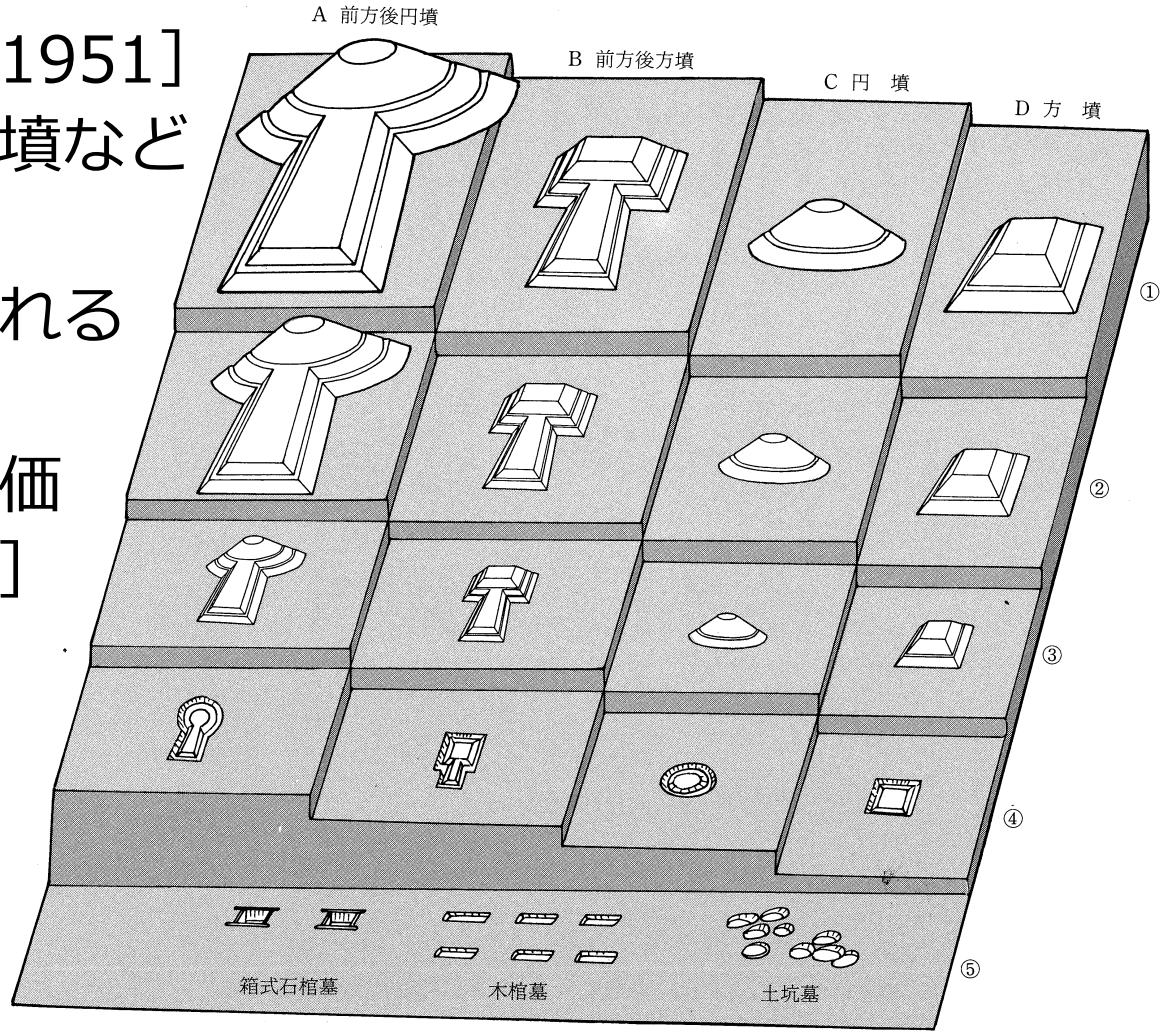
・上記２説とは異なる緩やかな地域秩序を評価
［池淵1997、赤澤1999など］

②広域性重視：「前方後円墳体制」に近い

・前方後円墳と対比的に評価される方墳
方墳を前方後円墳に従属する墳丘形態
とみる［渡辺1986］

出雲の出現期方墳をめぐる既往の評価は、
弥生墓・古墳の関係を連続・断絶のいずれとみるか

「連続：在地性←→断絶：広域性」概念で説明



「前方後円墳体制」モデル
［都出比呂志1989「古墳が造られた時代」
『古墳時代の王と民衆』古代史復元６　講談社］

3．前期大型方墳の築造とその背景

●前期大型方墳の集約的築造と荒島墳墓群

（古墳前期：３世紀後半～４世紀後半）

荒島墳墓群

島根県安来市・飯梨川左岸に位置

弥生時代後期後葉から四隅突出墓

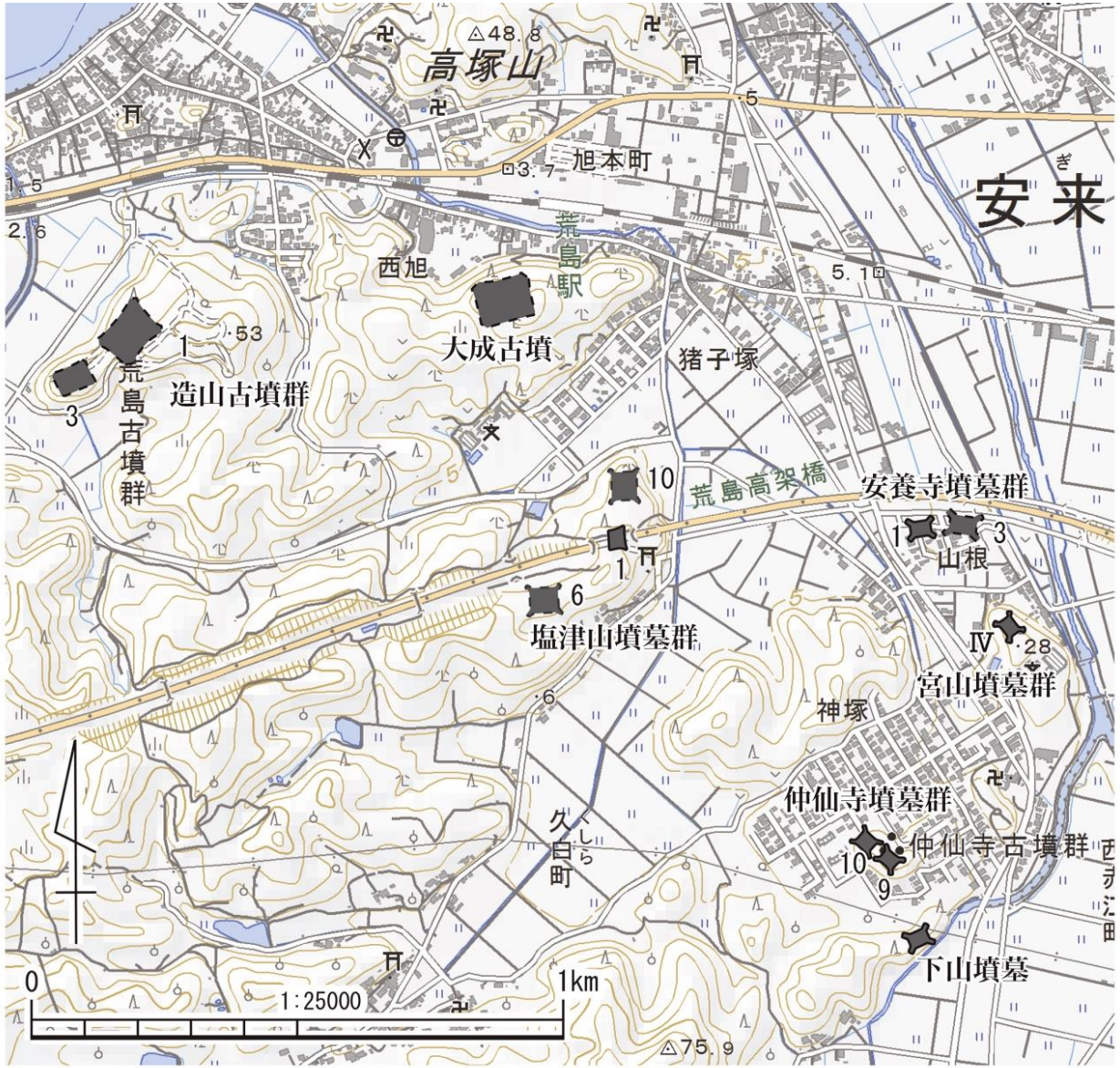
古墳時代前期には列島最大級の方墳が

断絶もあるが限られた期間に集約的に築造

出雲における方墳の卓越性・

大型方墳築造の意味を考えるうえでは

格好のフィールド



［国土地理院地図に加筆］

●四隅突出型墳丘墓とは

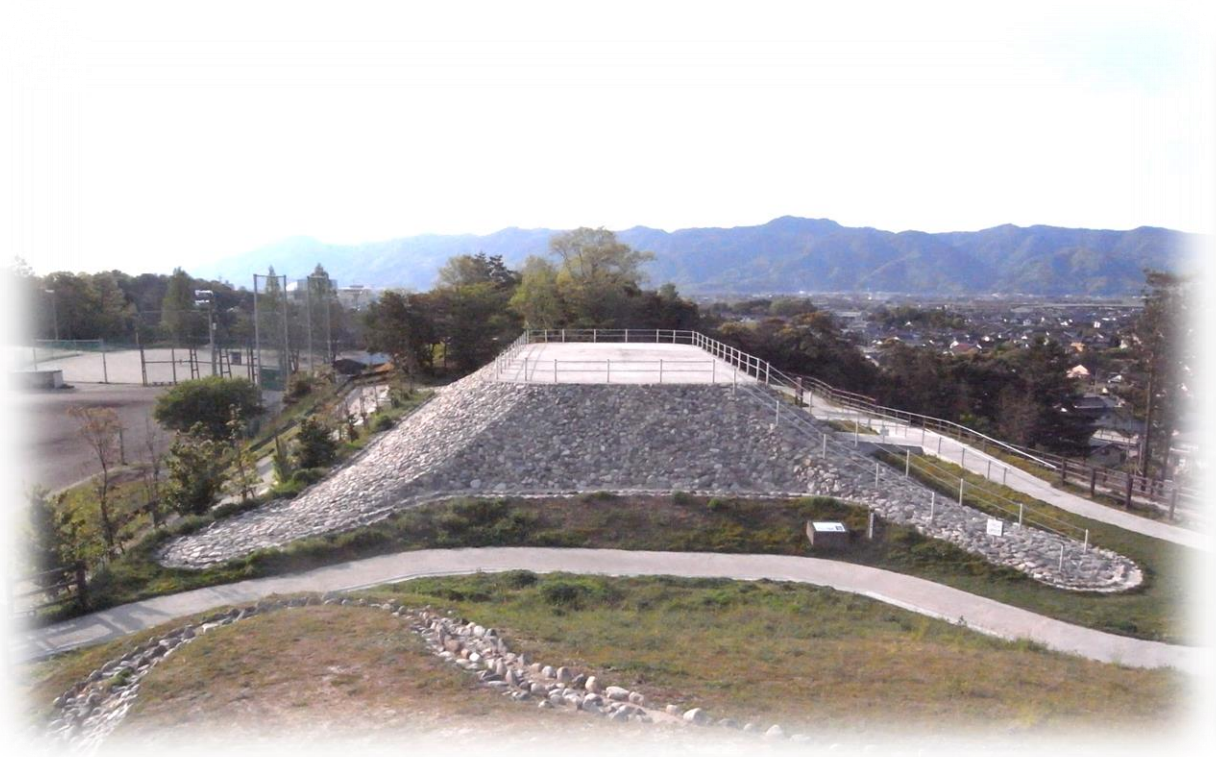
弥生時代の墳丘墓の形式の一つ

長方形墳で、隅部に明瞭な突出部を備える

墳丘に特徴的な配石構造をともなう例が多い、墳頂部に埋葬施設を構築

弥生時代中期後葉ごろに出現、弥生時代いっぱい山陰を中心に継続的に築造される

出雲地域では弥生後期後半以降、とくに大型の四隅突出墓が築造される傾向にある



整備された西谷２号墓（辺35m×辺24m　後期後葉）

四隅突出型墳丘墓の模型（３Dデータ）

●塩津山１号墳の評価

・荒島墳墓群の前期大型方墳を理解するうえで、塩津山１号墳の評価はきわめて重要

・四隅突出墓風の墳丘形態の評価については、見解が二分してきた

①四隅突出墓の「伝統」を残す墳丘

②突出部は造出しあるいは隅角（通路）

※古墳の時期的位置づけとも関係

①説：前期初頭と古く位置づけ

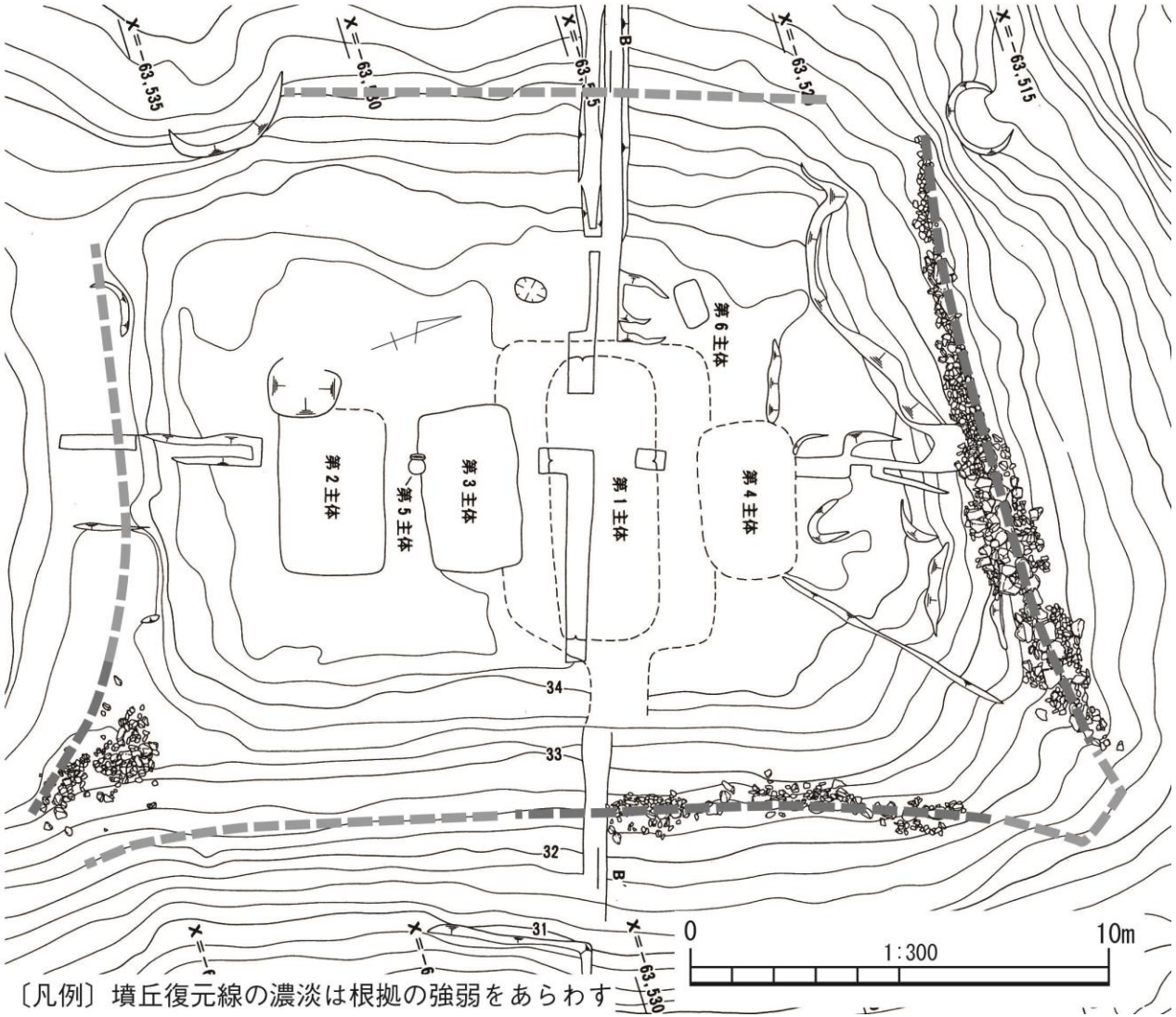
→四隅突出墓と連続

［池淵1997、藤田2006］

②説：前期後半と新しく位置づけ

→四隅突出墓と断絶（無関係と評価）

［松山2002］



塩津山１号墳の墳丘

長辺約25m×短辺約20mの方墳

段築なし・葺石あり　竪穴式石槨ほか

［報告書図面に加筆］

●荒島墳墓群にみる前期大型方墳の特質

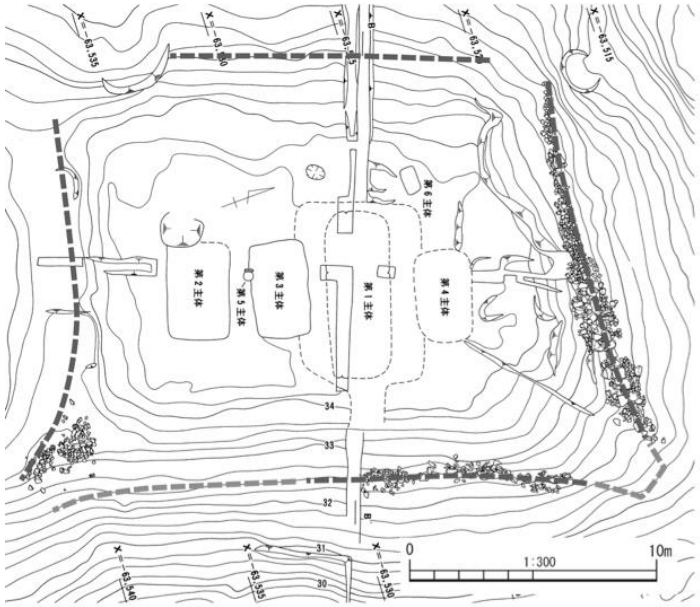
<u>墳丘形態</u>　おおよそ長方形を呈するが墳丘前面が拡張

＝直線的な墳丘形態とはならず、四隅突出墓風にみえる

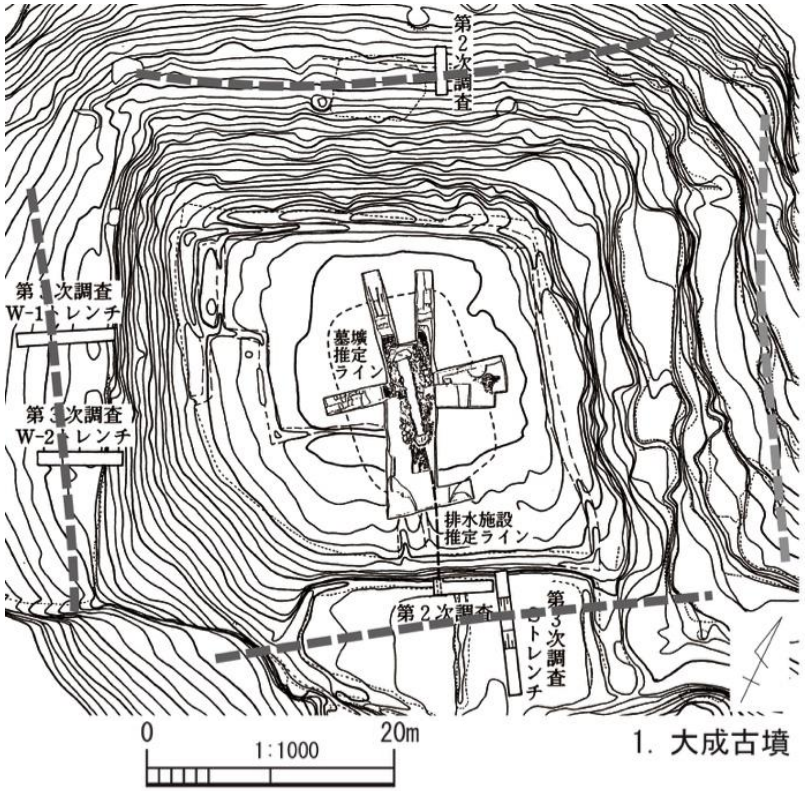
<u>外表施設</u>　葺石をくわしく確認できるのは、塩津山１号墳のみ

貼石・敷石・列石風だが、全周しない

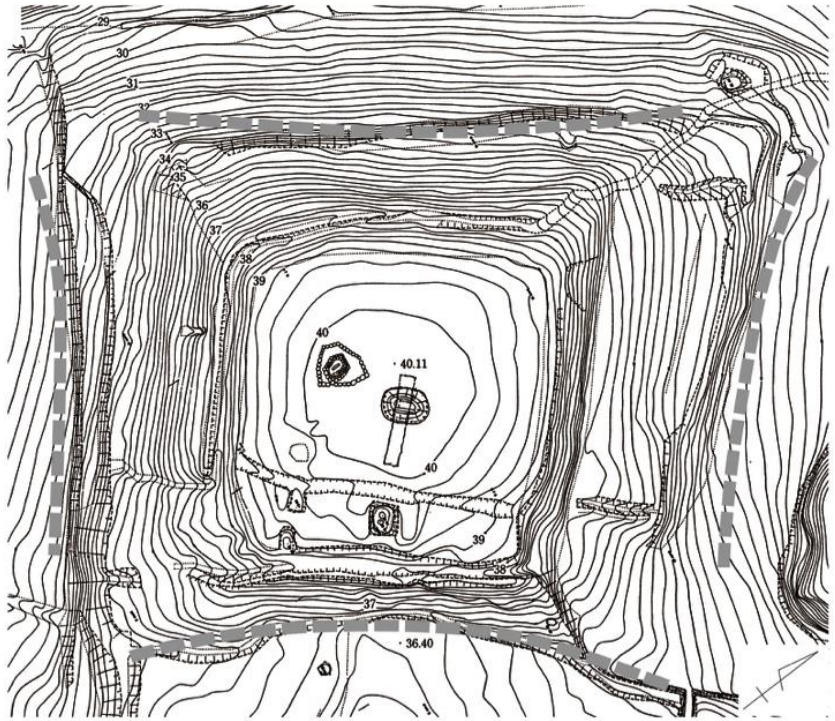
［報告書図面に加筆］



塩津山１号墳



大成古墳



造山１号墳

●不可視的属性にみる異同

○埋葬施設

前期大型方墳と竪穴式石槨

（近畿中央部とのむすびつき）

四隅突出墓と木槨

○副葬品（稀少財の入手・保有）

前期大型方墳と銅鏡（三角縁神獣鏡）

（近畿中央部とのむすびつき）

四隅突出墓とガラス製品

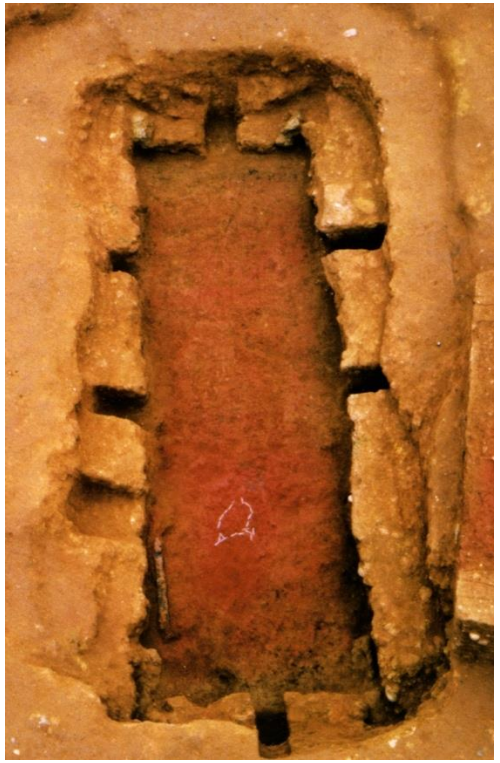
（環日本海交流による関係）

◉不可視的属性は相違点が目立つ

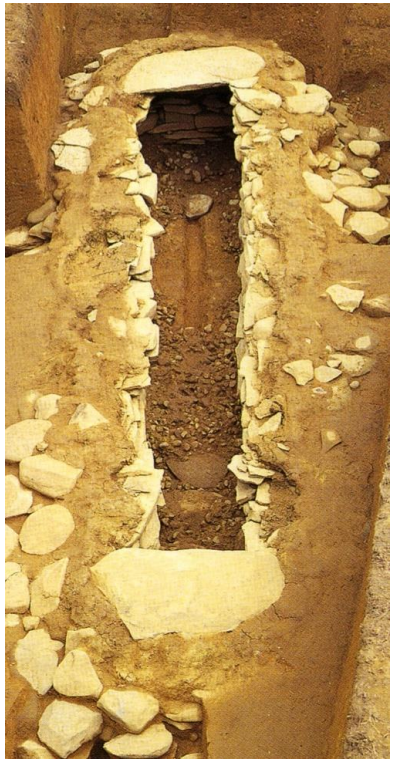
→前期大型方墳と四隅突出墓とは

直接的にはつながりが乏しい

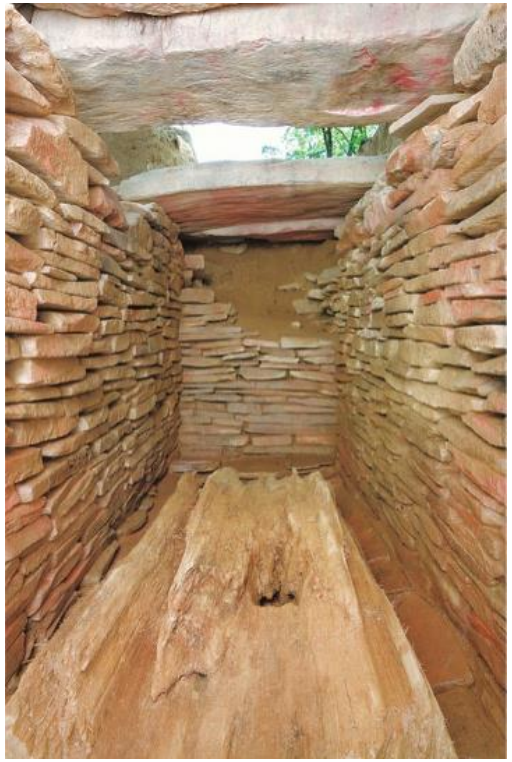
［遺構写真等は報告書より］



西谷３号墓



大成古墳



奈良県桜井茶臼山古墳

西谷３号墓

銅鏡：左は大成古墳、右は造山１号墳出土（どちらも東京国立博物館所蔵）

●可視的属性にみる異同

［図・写真は報告書等より］

○墳丘

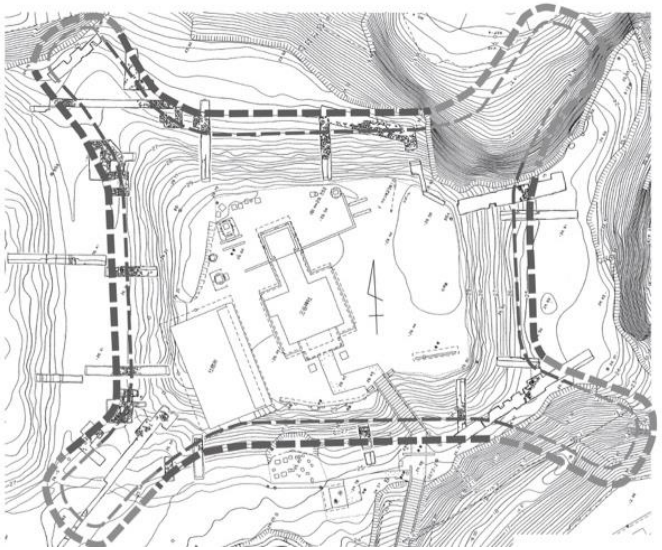
前期方墳　辺が湾曲し、隅部が張り出す

四隅墓　辺は直線的、隅部は明瞭に突出

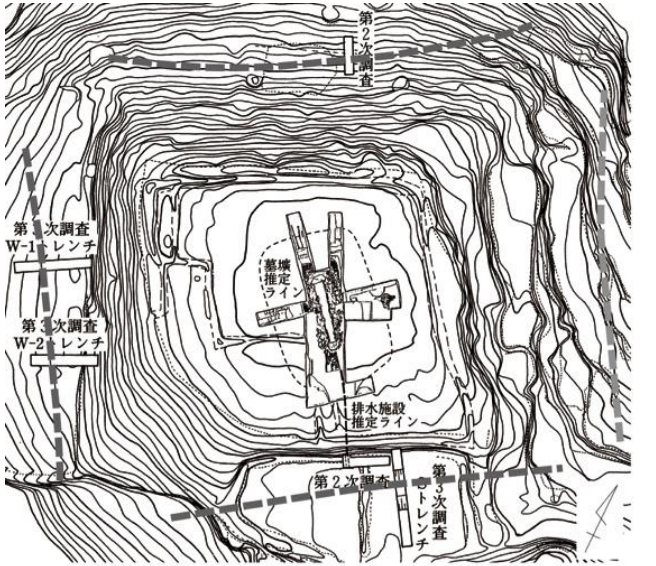
○外部施設（配石構造と葺石）

前期方墳　斜面貼石、裾に集石

四隅墓　斜面貼石、裾に敷石帯・立石



西谷９号墓



大成古墳

◉可視的属性は

おおまかに類似

厳密な部分では差異

→築造原理などは非共有

直接的つながりは弱い

西谷３号墓

安養寺３号墓

塩津山１号墳

●荒島墳墓群にみる前期大型方墳の特質

副葬品　倭王権との関係性を示す副葬品としての銅鏡

後漢鏡（斜縁神獣鏡）

魏晋鏡（三角縁神獣鏡・「仿製」三角縁神獣鏡・方格規矩鏡２面）

完形鏡の継続的入手・副葬：山陰ではここまでの例はほかにない

→　倭王権との関係の強さ+在地での主導性の高さ

◉在地的な方墳を採用するいっぽう、倭王権との継続的かつ強い関係がみられる

23.9cm

大成古墳出土銅鏡（東京国立博物館所蔵）

24.0cm

17.3cm

造山１号墳１号石槨出土銅鏡（どちらも東京国立博物館所蔵）

14.5cm

造山３号墳出土銅鏡

●再生された四隅突出型墳丘墓

可視的属性の大まかな類似・不可視的属性の相違

→連続した築造ではなく、模倣による築造

●象徴としての四隅突出型墳丘墓

○モデルとなった四隅突出墓は西谷９号墓か

（配石構造の細部、規模の類似から）

→大型墳墓としての四隅突出墓の「復古」に意義

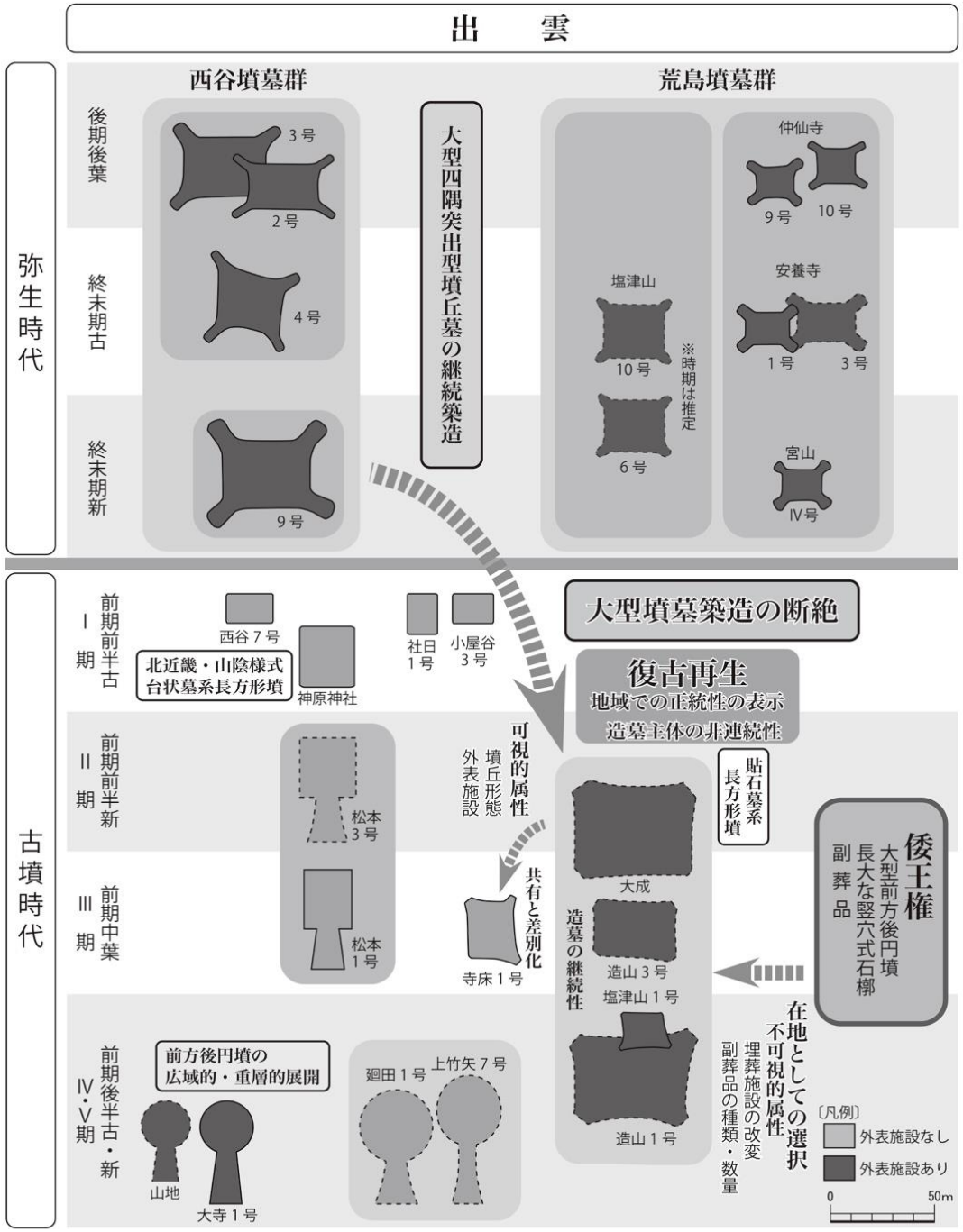
＝造墓集団の正統性を墳墓築造により明示する意図

○出雲の範囲のなかで四隅突出墓が「復古再生」

＝四隅突出墓の地域での象徴性の強さ

cf.「栄光」と「挫折」論と東西出雲論（渡辺1986）

◉出雲の方墳卓越をすべて荒島墳墓群と同一視できないが、弥生時代以来の墳形の維持が方墳重視の背景にあった可能性は高い



出雲における古墳出現前後の首長墓築造モデル［岩本崇2017「再生された四隅突出型墳丘墓」『考古学研究』64-1］

4．山陰における前方後円墳の出現・展開

●導入機の前方後円墳の様相

本格展開は前期末・中期初頭

前期中葉ごろから先行して

円墳とともに点的に出現

前期後半における
山陰（北近畿含む）での出現
各地域では点的に導入

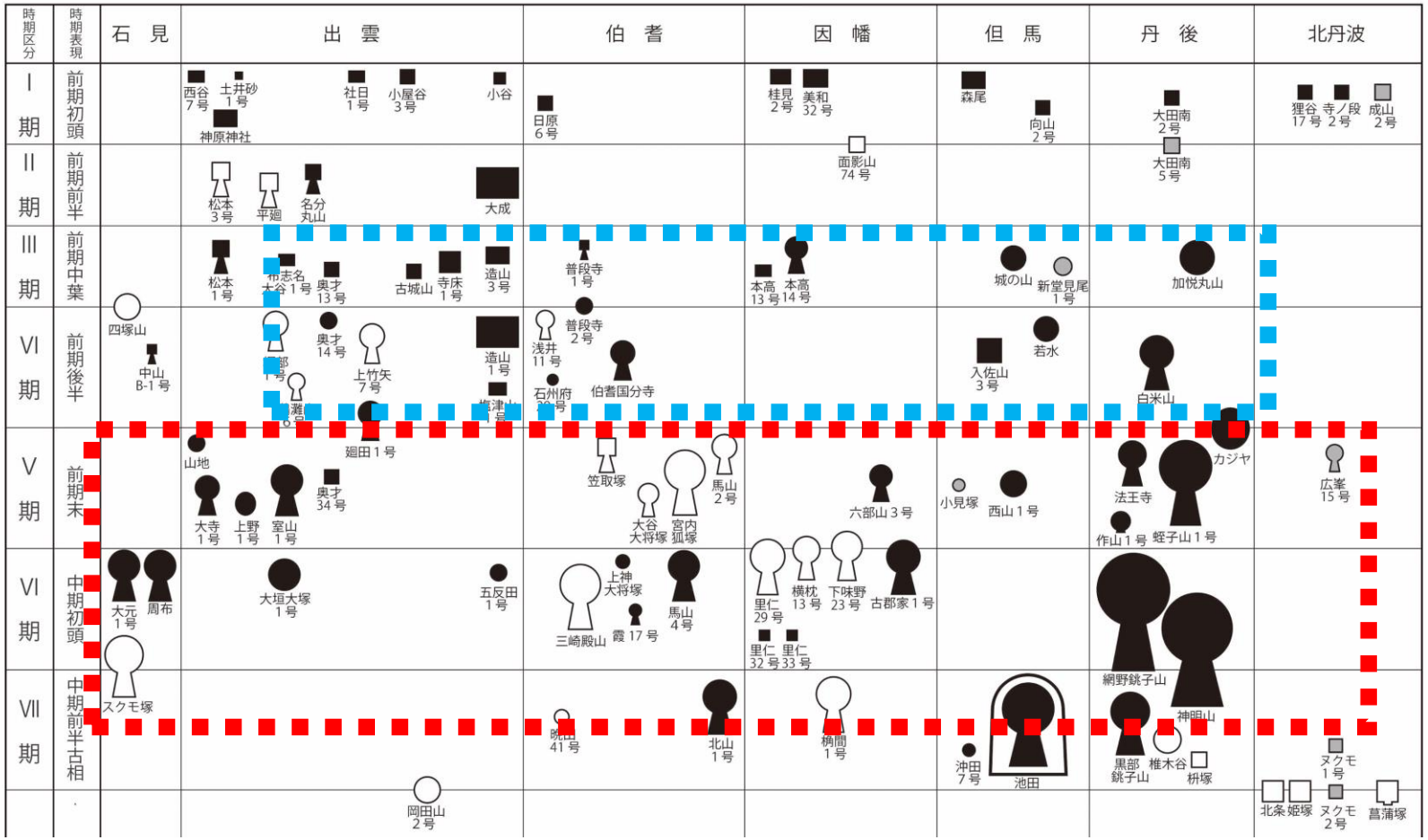
前期末の広域的・連動的波及
各地域でも安定的・継続的に存在

出雲の動向も山陰（・北近畿）

と一体的な評価が可能

※前期大型方墳のないエリアに

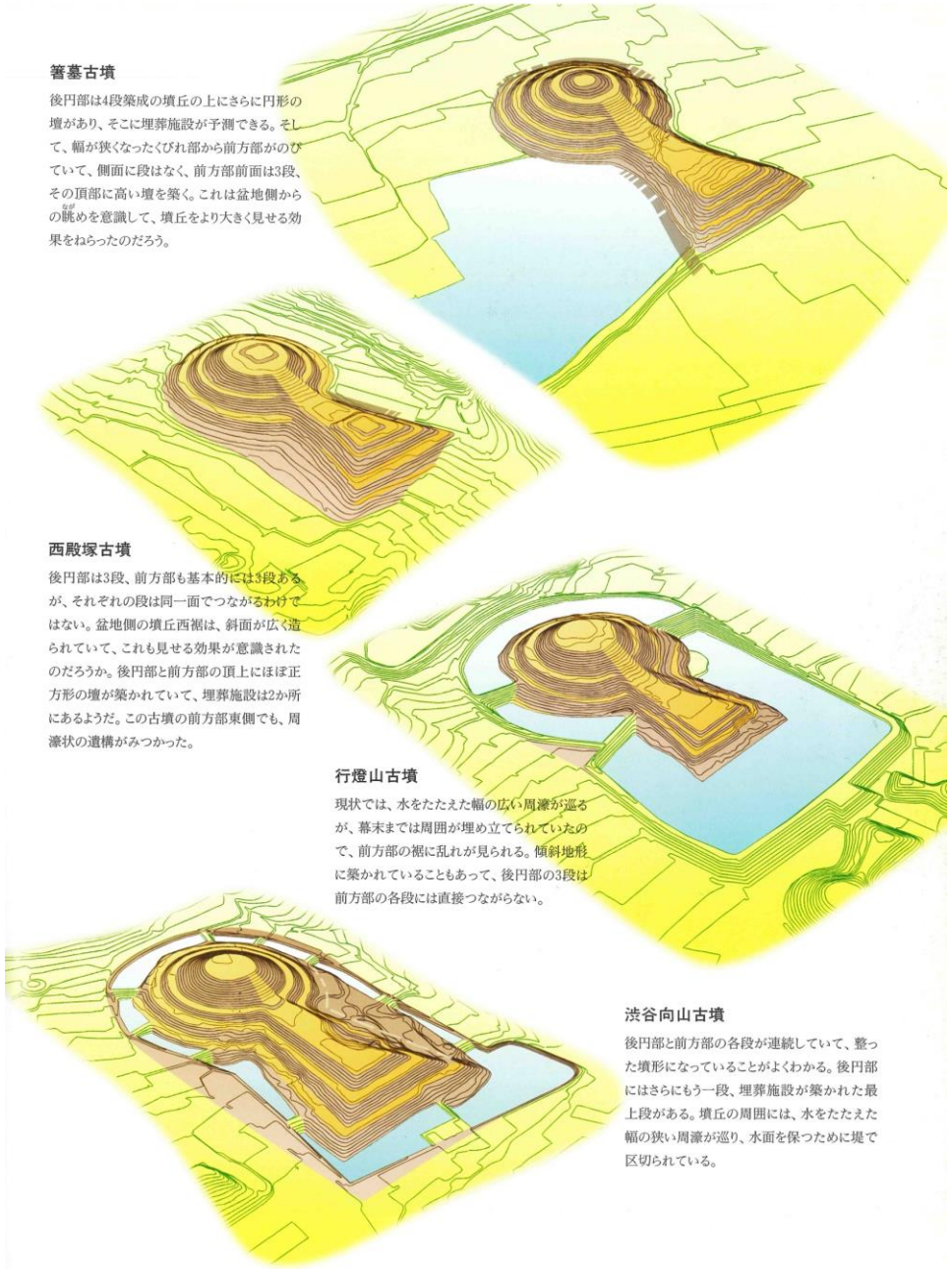
前方後円墳が導入される傾向



山陰（・北近畿）における首長墓の展開

王陵としての前方後円墳

→周辺でのその採用は<u>王権との連合の象徴</u>



奈良県柳本古墳群　行燈山古墳（左）渋谷向山古墳（右）三輪山（中央上）

［写真・図ともに奈良県立橿原考古学研究所附属博物館ほか編2000『大古墳展』東京新聞］

前方後円墳の変遷

●前方後円墳にみる集団関係

設計の検討と「型」の認識［上田1969、椚1975など］

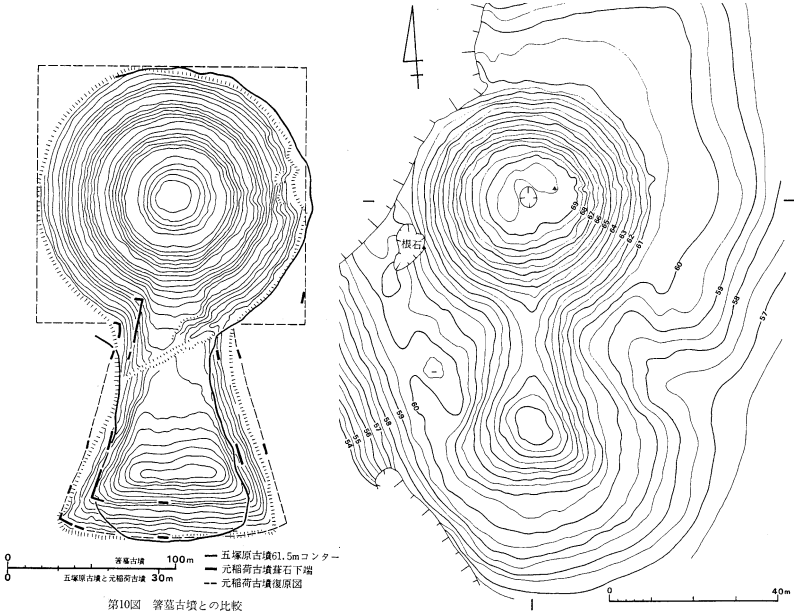
→ 設計図の存在とその共有の可能性［近藤1983］

→「同形墳」（同形同大）

「相似墳」（同形）　　の認識［和田1981など］

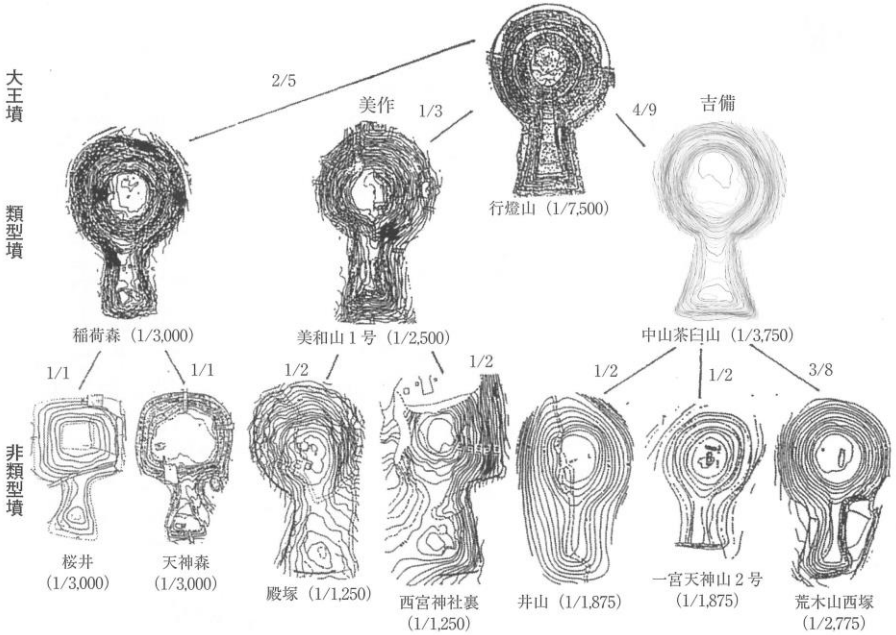
→「類型墳」の抽出と波及プロセスの検討

［岸本1992、澤田2017］



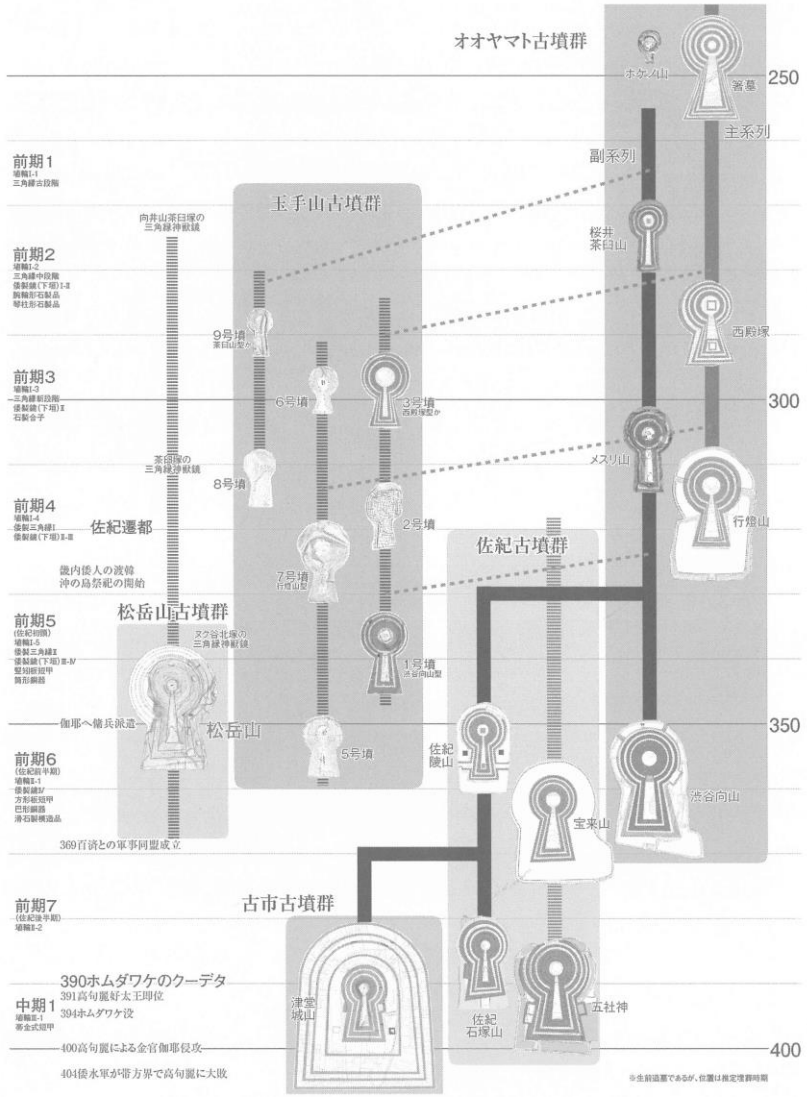
箸墓古墳と五塚原古墳の比較

［和田晴吾1981「向日市五塚原古墳の測量調査より」『王陵の比較研究』京都大学文学部考古学研究室］



吉備地域における行燈山類型と非類型墳

［澤田秀実2017『前方後円墳秩序の成立と展開』同成社］



前方後円墳の変遷と類型墳

［岸本直文2020『倭王権と前方後円墳』塙書房］

●前方後円墳と前期古墳の多様性

第１群前方後円墳（≒地域型）と第２群前方後円墳（≒王陵系）［北條2000］

類型墳と非類型墳［澤田2017など］

ex.讃岐型前方後円墳［北條1999］、播磨揖保川流域の前方後円墳［岩本2010］、

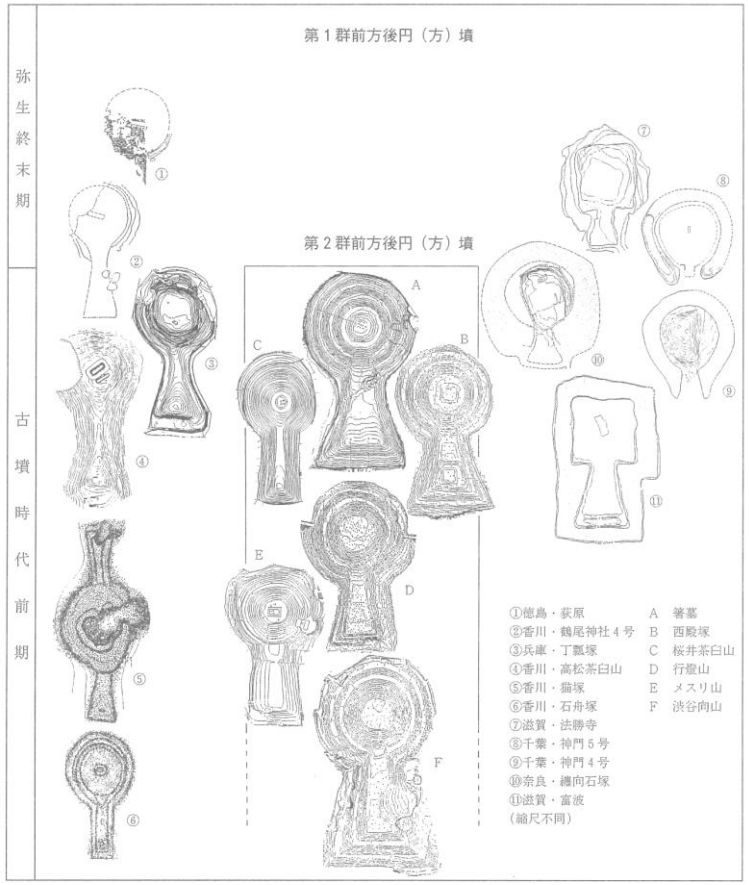
東日本の前方後方墳、「再生された四隅突出型墳丘墓」も地域型の出現期古墳

●出雲における前方後円墳導入の意義

・先行する前期大型古墳との関係は？

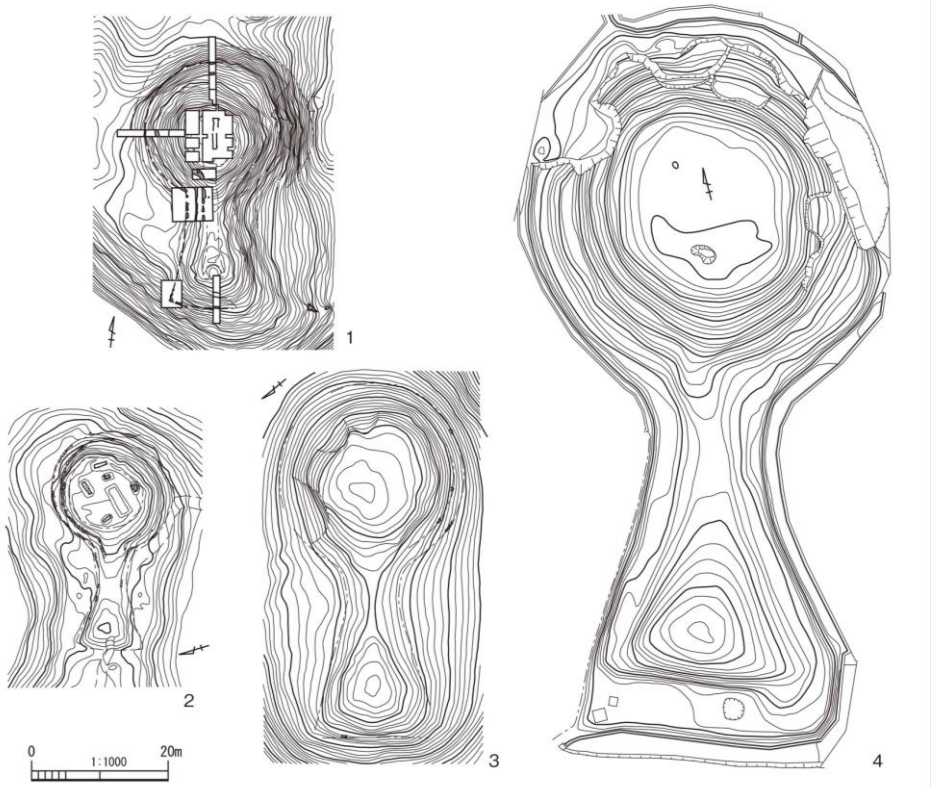
・段階的な導入をどのように理解できるか？

・いかなる社会背景の反映として導入されたか？（王権や周辺地域との関係はいかなるものか）



前方後円墳の二相

［北條芳隆2000「前方後円墳と倭王権」『古墳時代像を見なおす』青木書店］



1. 龍子三ツ塚１号墳　2. 養久山１号墳　3. 景雲寺山古墳　4. 丁瓢塚古墳

前期前半の揖保川流域に展開する地域型前方後円墳

［岩本崇2010「古墳時代前期における地域間関係の展開とその特質」『龍子三ツ塚古墳群の研究』大手前大学史学研究所］

●近畿中央部の大型前方後円墳の実態

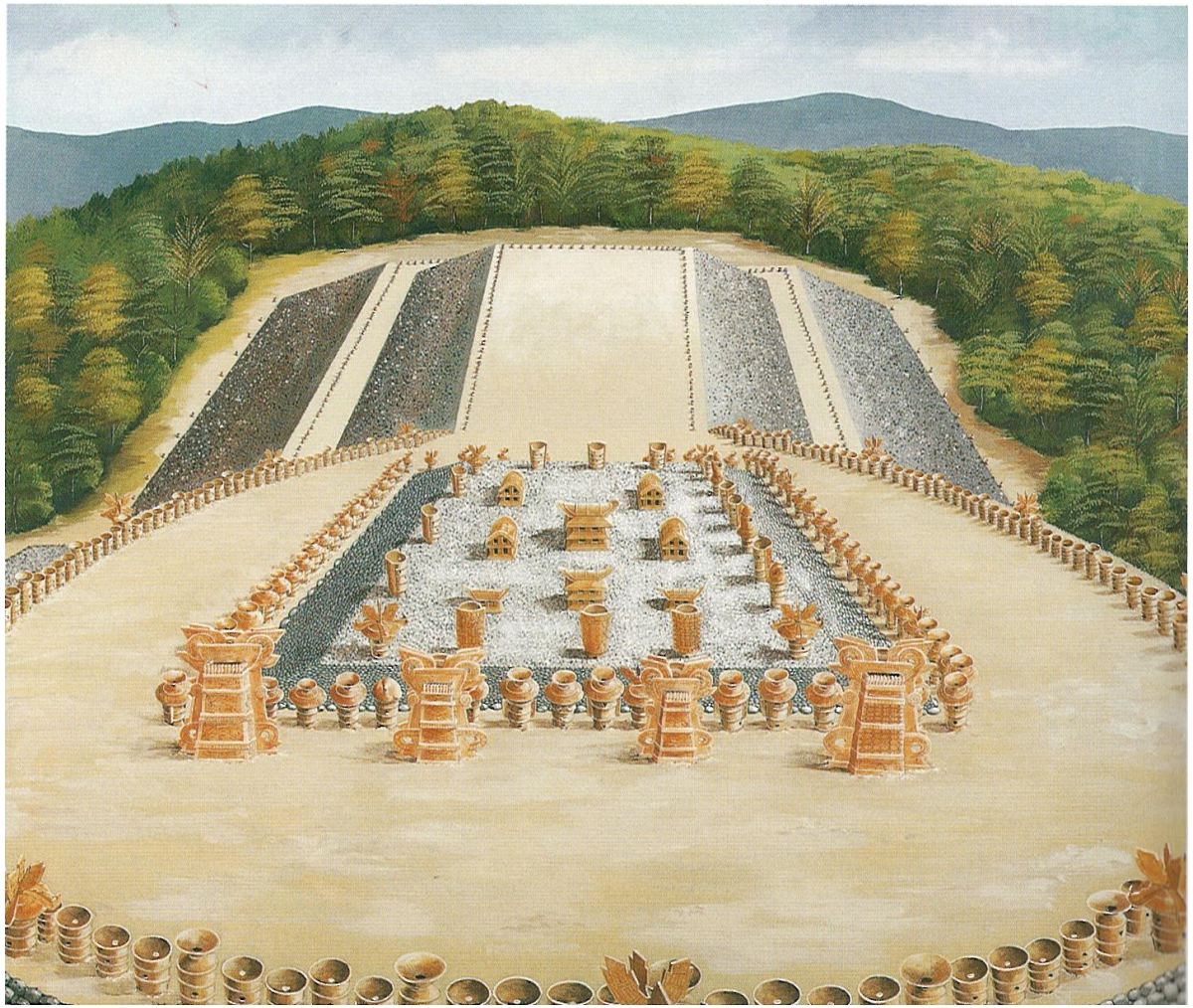
段築成・葺石（礫敷）・埴輪などの定型性の強さが特徴

→その共有の度合いは、前方後円墳・古墳の築造にかかわる情報共有のあり方に起因

ひいては王権をめぐる地域間関係を反映

大阪府弁天山C１号墳の墳丘

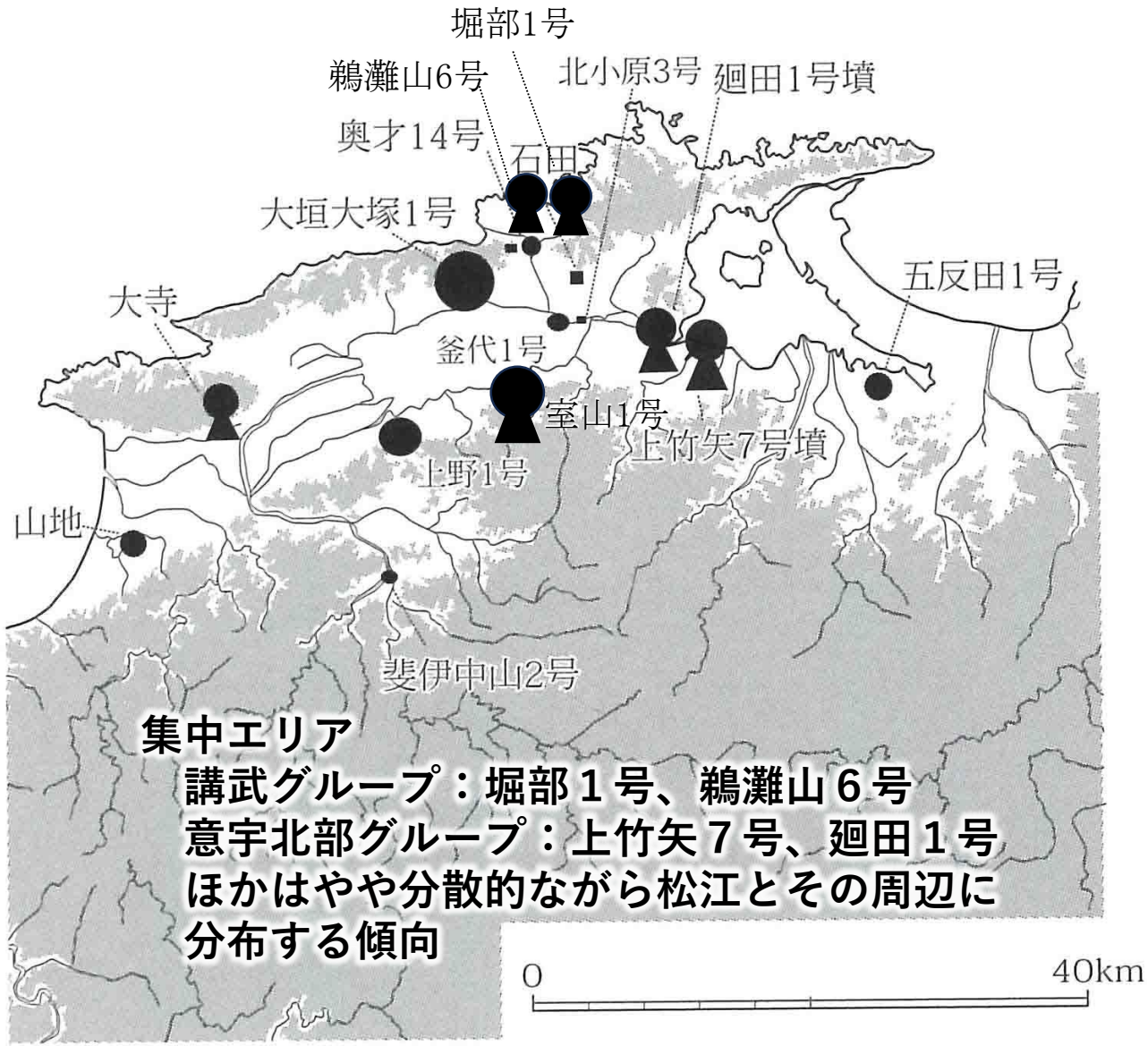
［高槻市立しろあと歴史館2006『三島古墳群の成立―初期ヤマト政権と淀川―』］



三重県石山古墳の墳丘と埴輪列の復元図

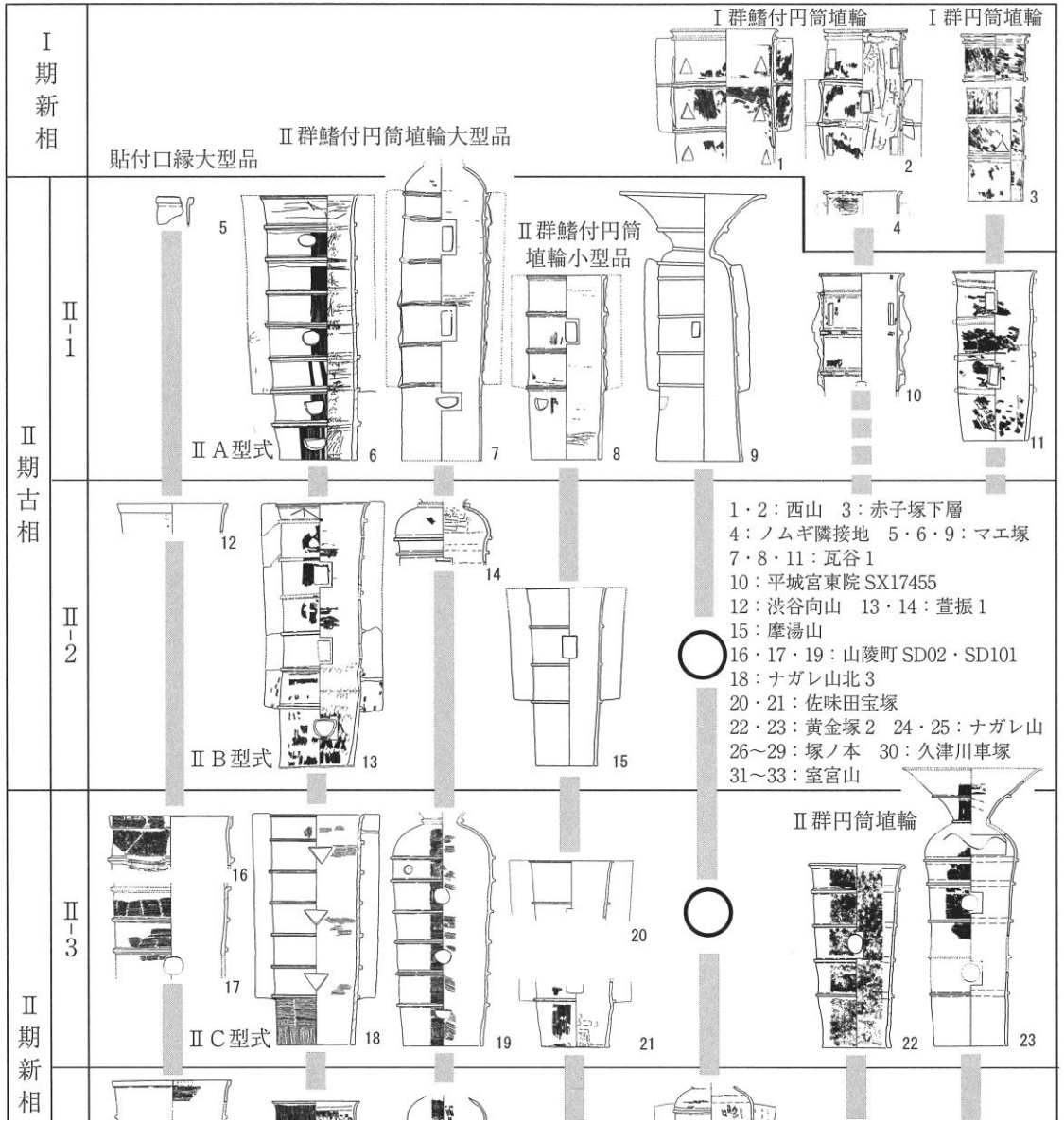
［奈良県立橿原考古学研究所附属博物館ほか編2000『大古墳展』東京新聞］

●出雲における円形原理墳の導入状況



導入期の円形原理墳の分布

［池淵俊一2017『古墳時代史にみる古代出雲成立の起源』松江市に加筆］

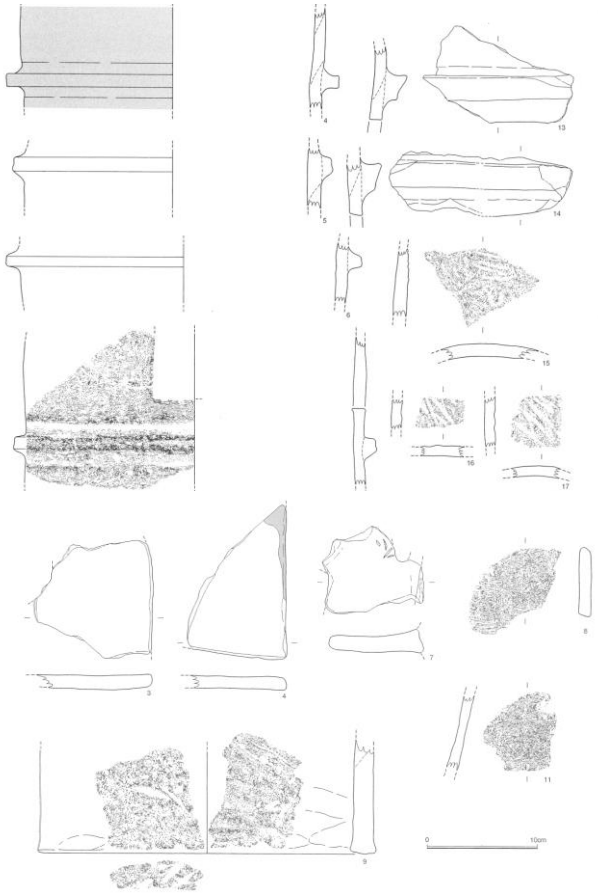


王権中枢部における円筒埴輪の変遷

［廣瀬覚2015『古代王権の形成と埴輪生産』同成社］

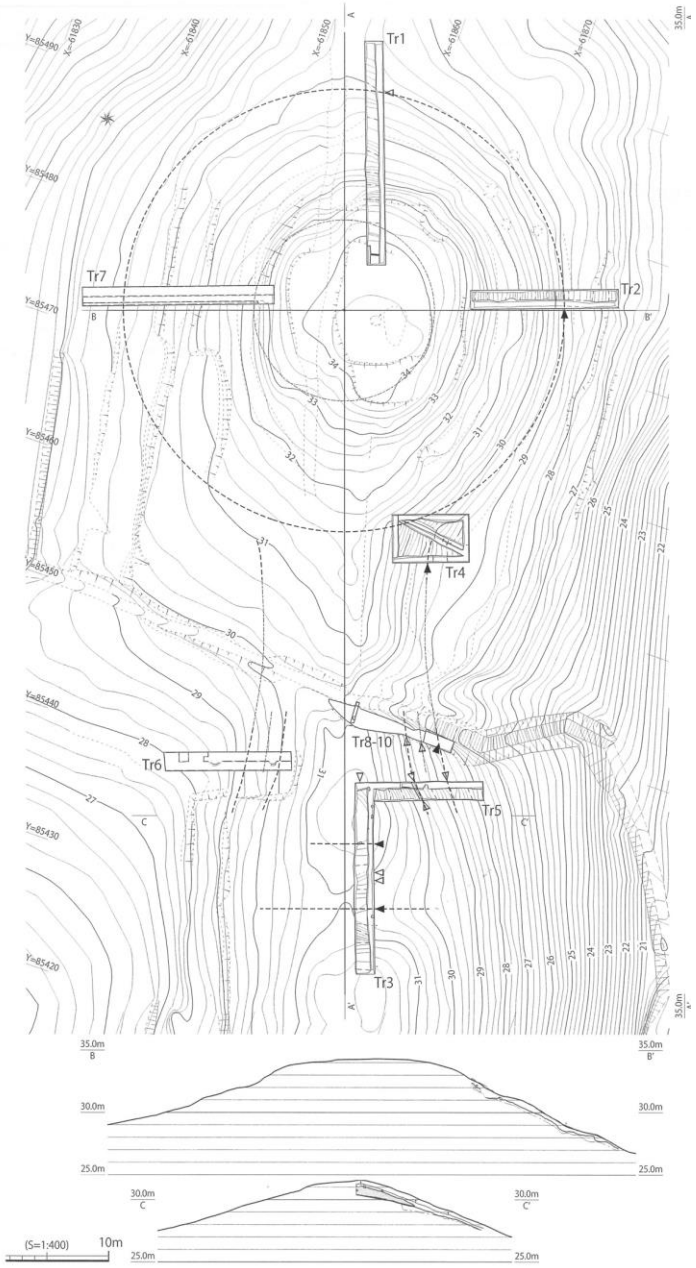
●廻田１号墳

［図は報告書より］



墳丘長57m
後円部２段・前方部２段？
葺石なし、埴輪あり
前方部は短く前端が広め
埴輪は一段に透孔３孔以上
ヒレ付き　→　Ⅰ期新相

●上竹矢７号墳



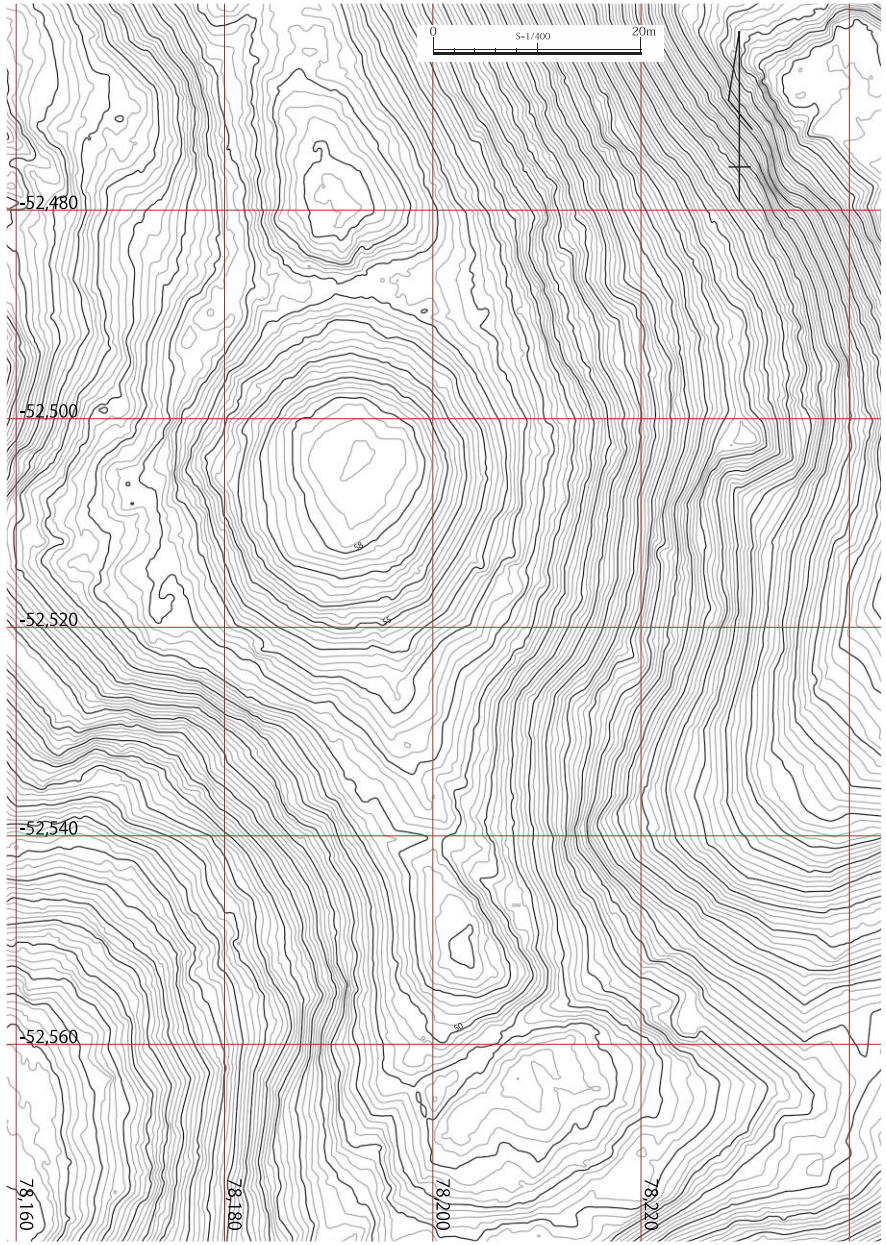
墳丘長66m
後円部３段？
前方部２段？
葺石なし
埴輪なし
前方部は細長く
　前端に向かって
　　緩やかに広がる

埴輪の不在から
　廻田１号墳に
　　先行する可能性

［図は報告書より］

<u>意宇北部グループ</u>

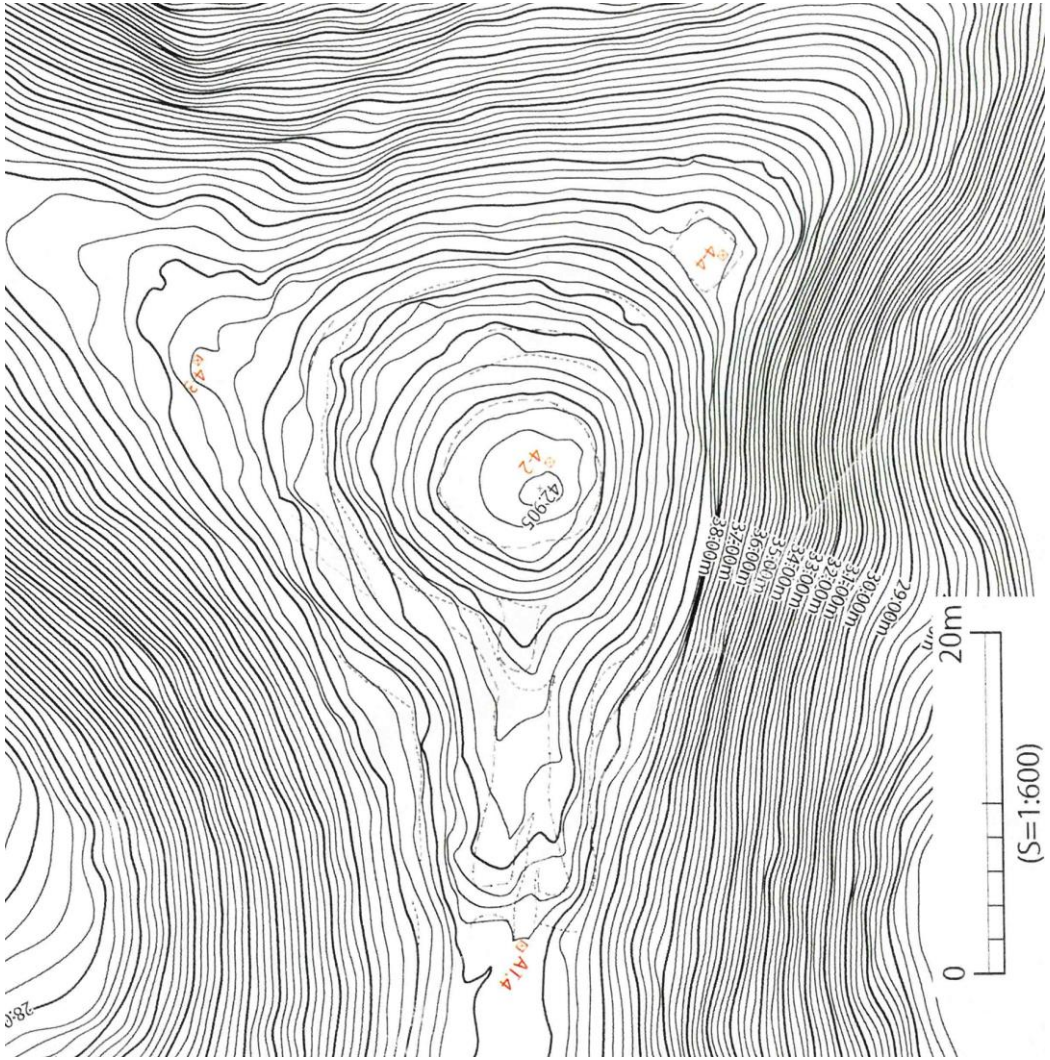
●堀部１号墳　［図は島根県提供］



講武グループ

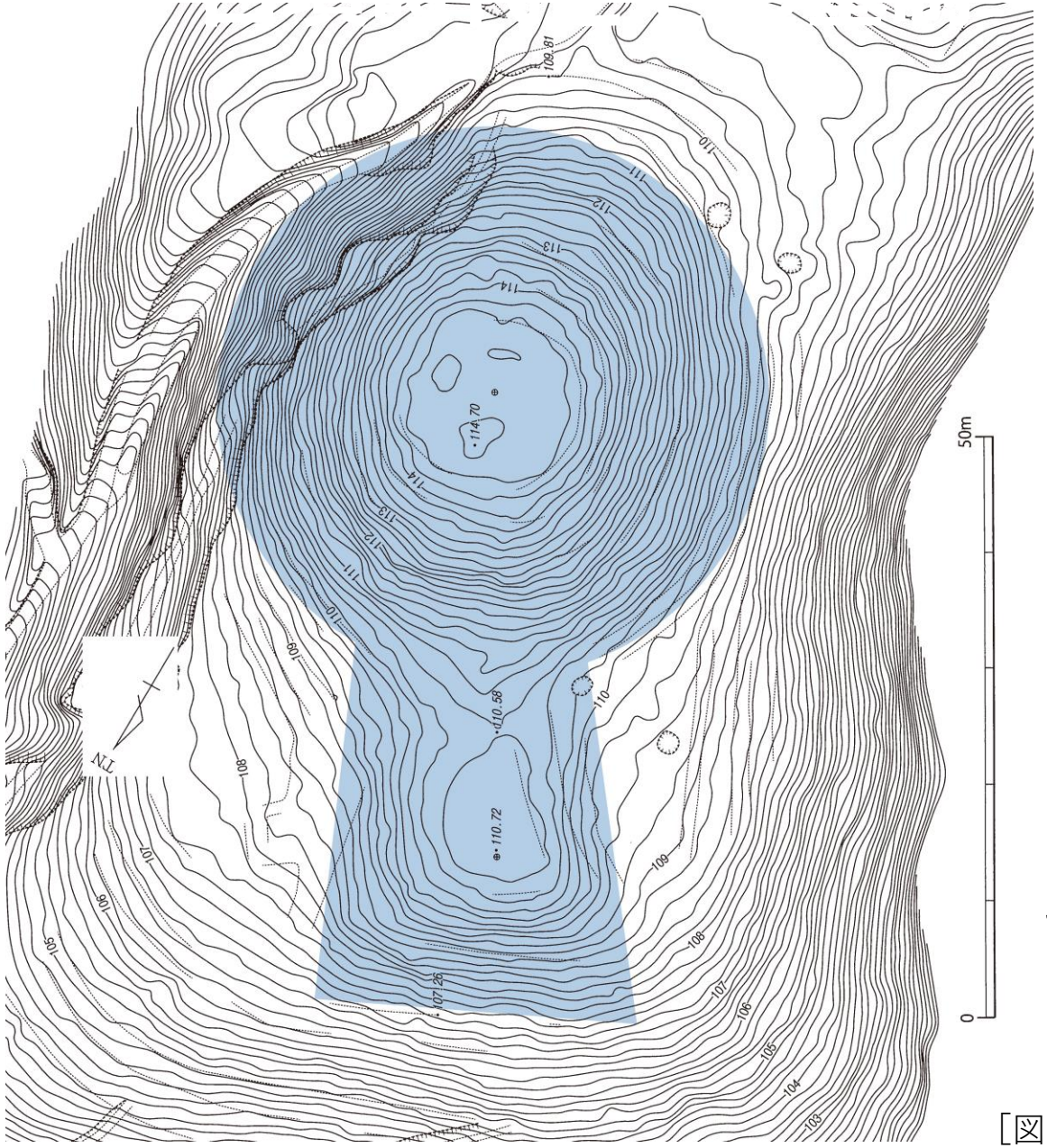
墳丘長72m？
後円部３段？
・前方部２段？
葺石なし？、埴輪なし？
前方部は細長く、
前端に向かって
大きく広がる
埴輪不在、墳形から
前期後半を遡る可能性も

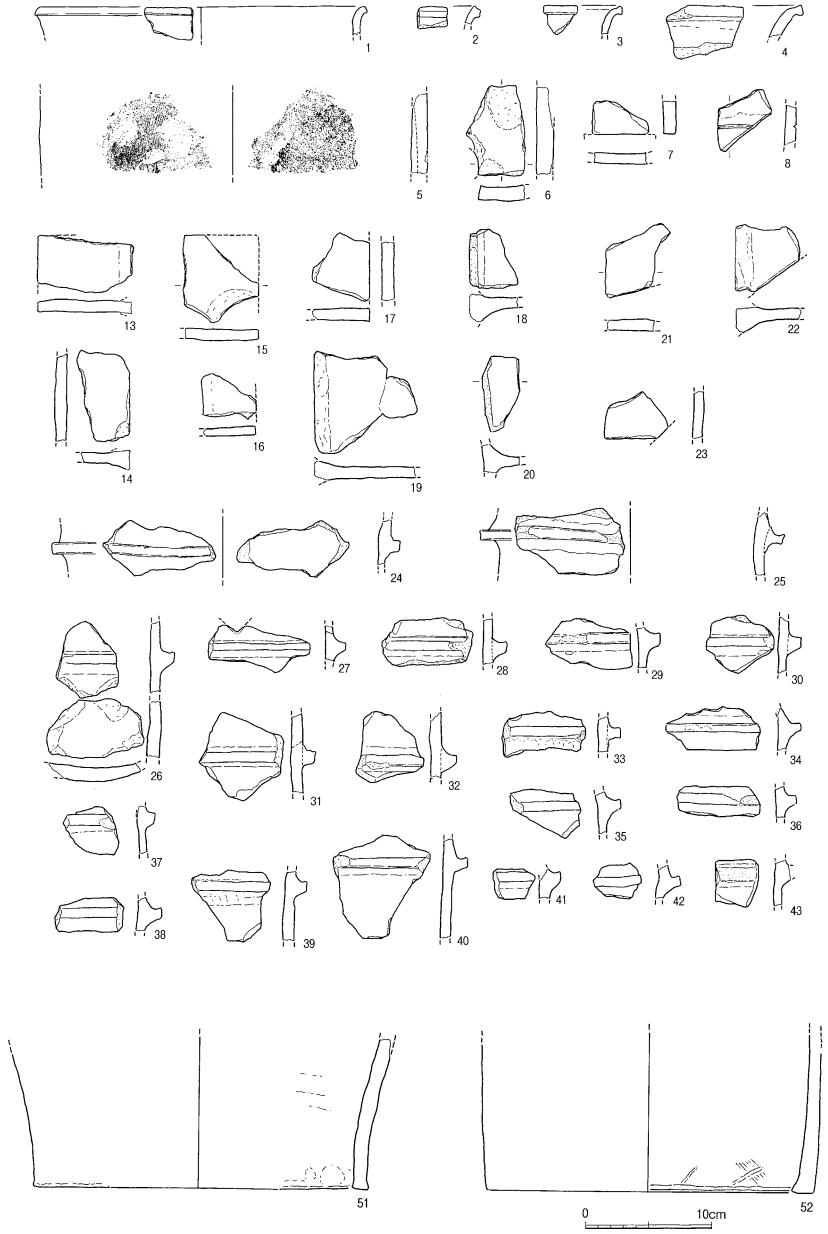
●鵜灘山６号墳　［図は島根県提供］



墳丘長40m？
後円部？段・前方部？段
葺石なし？、埴輪なし？
前方部は細長い

●室山１号墳





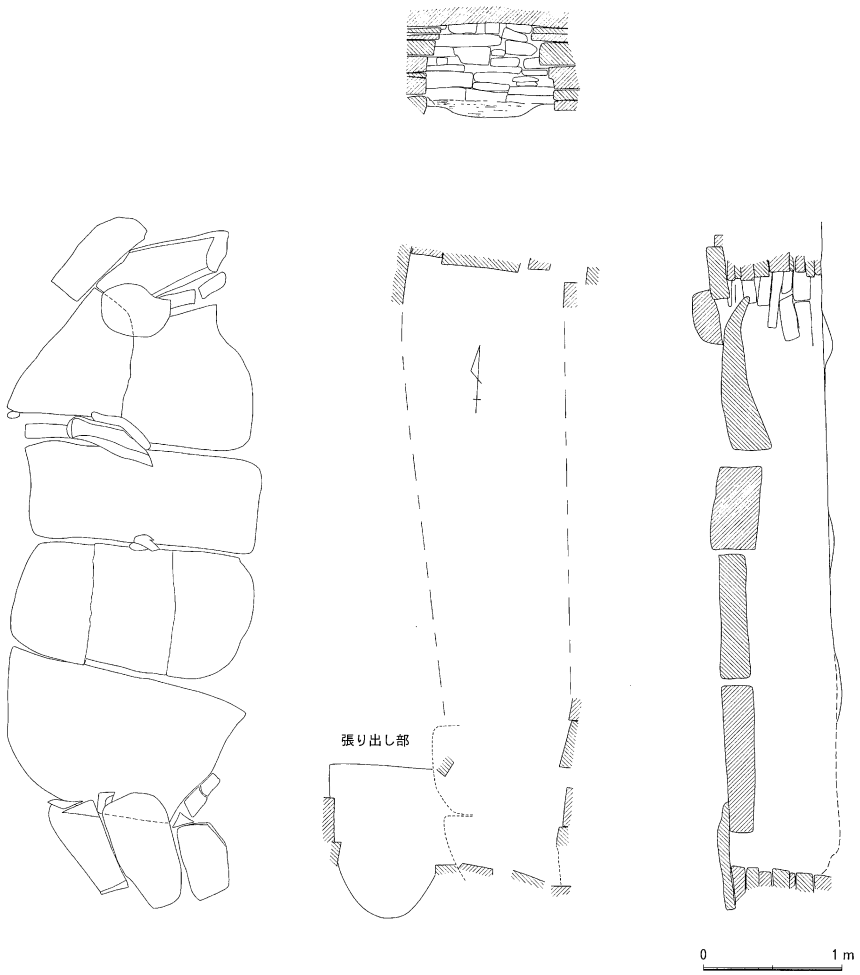
墳丘長80m級か
後円部３段？・
前方部２段？

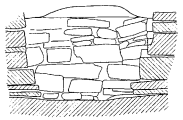
葺石なし、埴輪あり
　前方部は短く、
　前端にがやや広い
墳丘形態は
　廻田１号墳に近いか

埴輪は鰭付円筒埴輪が
　目立ち、Ⅱ期古相か

［図は内田律雄・曳野律夫・松本岩雄2024「松江市室山古墳群墳丘測量報告（上）
　一室山１号墳一」『島根考古学会誌』41より］

●大寺１号墳





① 石梯平面図の点線（一点破線）は、編集者が任意で入れたものである。
② 石梯小口の見通図にある石梯横断面は、石梯の何処を切ったものかは不明である。
③ 原図はすべて尺貫法で実測されている。

墳丘長52m
後円部２段・前方部２段
葺石あり、埴輪なし
　前方部はやや細長く、
　前端に向かって直線的に伸びる
副葬品から前期末の築造

［図は報告書より］

●出雲における導入期前方後円墳の実態

調査事例がなお少ないが、

①廻田１号墳と室山１号墳の墳丘、大寺１号墳と鵜灘山６号墳の墳丘は形態的にやや近い。

しかし、多くは形態・構造（段築）・外表施設の内容・埋葬施設には、古墳ごとの差が大きい。

②集中エリアである講武グループ、意宇北部グループそれぞれでも前方後円墳の特徴には差がある。

◉安定的かつ継続的な築造ではなく、都度にそれぞれが広域的な関係を構築して築造に至った可能性（埴輪も古墳ごとに差がある）

山陰の前期前方後円墳

番号	古墳名	全長	段築	葺石	埴輪	埋葬施設
因幡1	古郡家1号墳	93	後2前2	○	○	粘土槨・箱式石棺2
因幡2	六部山3号墳	66	－	×?	○	竪穴式石槨?・箱式石棺・埴輪棺
因幡3	本高14号墳	64	後2前1	×	×	不明2・木棺直葬4
因幡4	古海18号墳	50m級	―	×?	×?	
因幡5	古海17・28号墳	90m級	後あり	×?	×?	
因幡6	里仁29号墳	81	―	―	○	
因幡7	里仁23号墳	60m級	―	―	―	
因幡8	下味野23号墳	68		×?	×?	
東伯耆1	馬山4号墳	88＋	後あり	○	○	竪穴式石槨1・箱式石棺4・埴輪棺4
東伯耆2	馬山2号墳	68	―	×	○	―
東伯耆3	伯耆国分寺古墳	60	―	×?	×	木棺直葬（小口礫）・箱式石棺
東伯耆4	大谷大将塚古墳	50	―	×	―	箱式石棺?
東伯耆5	尾尻古墳	30		×	―	竪穴式石槨?
西伯耆1	霞17号墳	20	後1前1	○	―	竪穴式石槨
西伯耆2	浅井11号墳	44	後3?後2	×	×	竪穴式石槨
出雲1	清瀬2号墳	57	―	―	―	―
出雲2	堀部1号墳	72?	後3?後2?	×	×	―
出雲3	鵜灘山6号墳	40	―	―	―	―
出雲4	藤田2号墳	29	―	×?	×?	―
出雲5	上竹矢7号墳	66	後3前2	×	―	―
出雲6	廻田1号墳	57	後2	×	○	―
出雲7	室山1号墳	80m級	後3?後2?	×?	○	―
出雲8	大寺1号墳	52	後2前2	○	×	竪穴式石槨
石見1	周布古墳	74	後3前3	○	○	―
石見2	大元1号墳	88	後−前2?	○	○	―
隠岐1	甲の原2号墳	31	―	―	―	―
隠岐2	甲の原3号墳	28	―	―	―	―

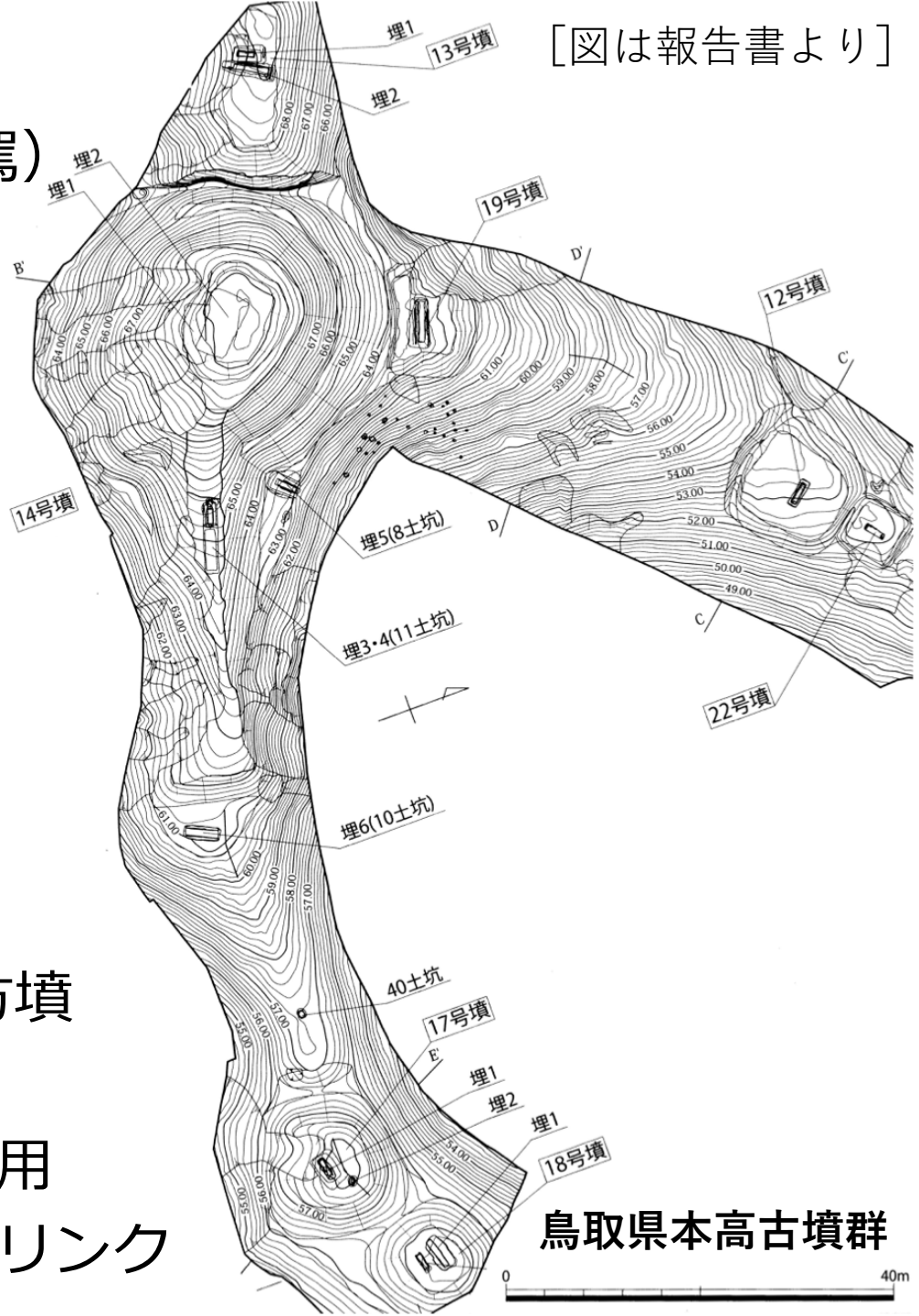
●山陰の出現期前方後円墳の特質

40～50m超級が基本サイズ（他の墳丘形式を凌駕）
竪穴式石槨を埋葬施設にする例が散見
墳丘構造から３類型に整理可能
①埴輪・葺石をもつ古墳
②埴輪・葺石のいずれかをもつ古墳
③埴輪・葺石のない古墳

①がもっとも強いまとまりをもつ
→時期的には古墳時代中期初頭・大型古墳も顕著
一定エリアに集中分布傾向→継続的な関係性
この時期が最大のピーク（丹後・但馬も連動）

②・③のうち葺石のない例は、それ以前の多くの方墳と共通した様相→在地的な特徴と評価できる
※地域的な選択的受容が前方後円墳導入にも作用
※※③は古墳時代前期中葉～後半の点的導入とリンク

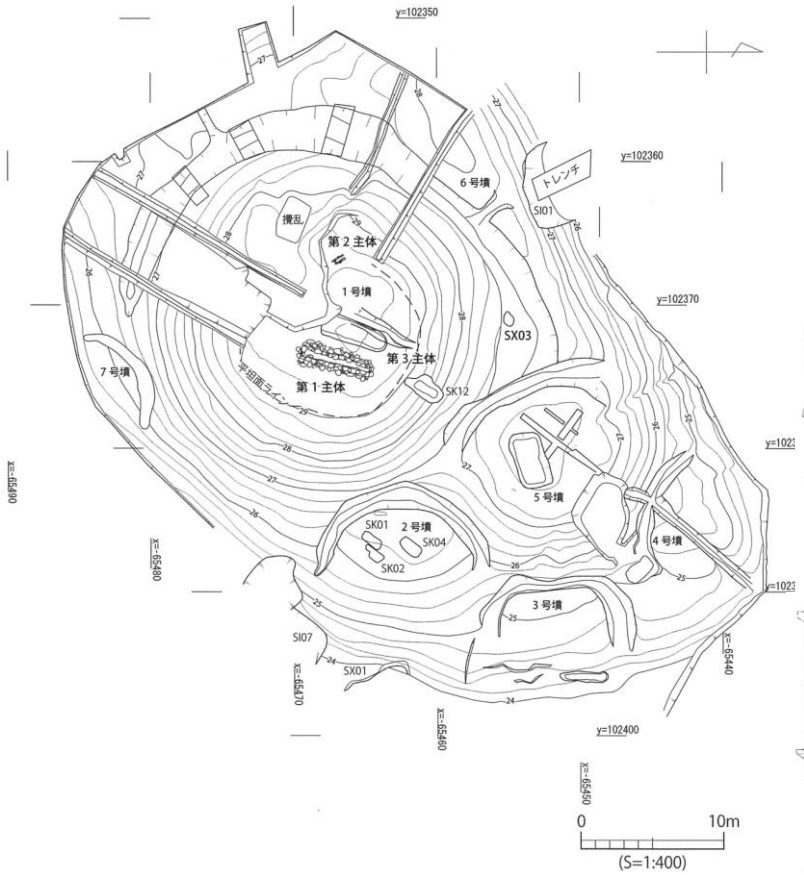
［図は報告書より］

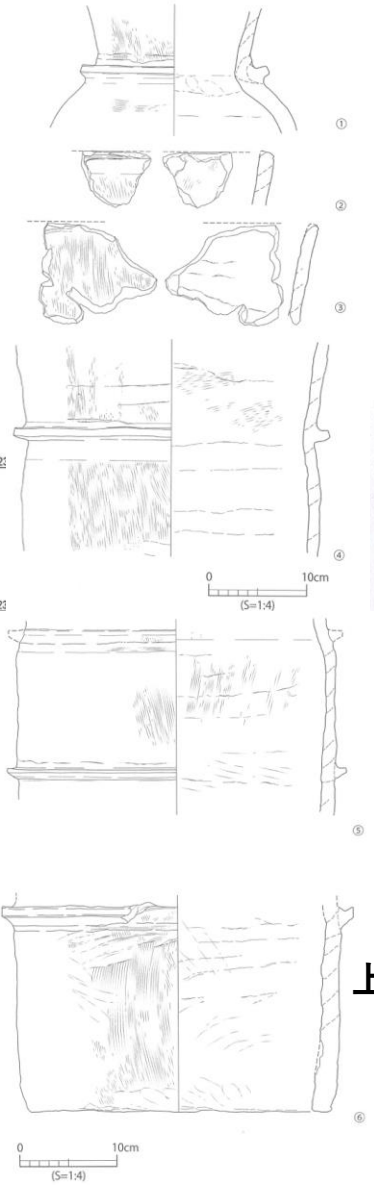


鳥取県本高古墳群

●前方後円墳と円墳―導入期にみる重層性―

前方後円墳とほぼリンクして大型円墳が出現（埴輪の導入など共通性）





五反田１号墳　安来市門生町
径約25m　段築なし
葺石なし、埴輪あり

［図は報告書より］

上野１号墳　円筒埴輪
［島根県立古代出雲歴史博物館2014『倭の五王と出雲豪族　ヤマト王権を支えた出雲』］

上野１号墳　松江市宍道町
径約40m　２段築成
葺石なし、埴輪あり

［図は報告書より］

●古墳にみる交流：前方後円墳

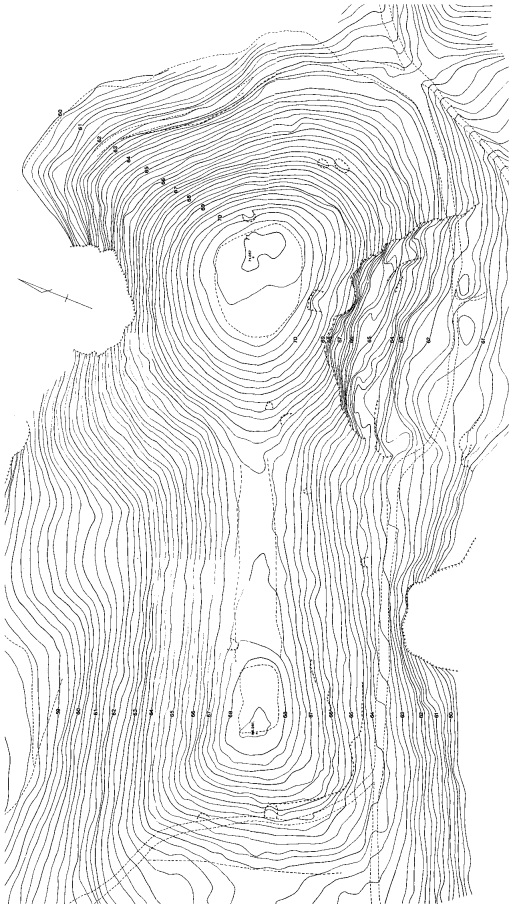
［図は報告書より］

石見地域の前方後円墳は葺石・埴輪をもつ

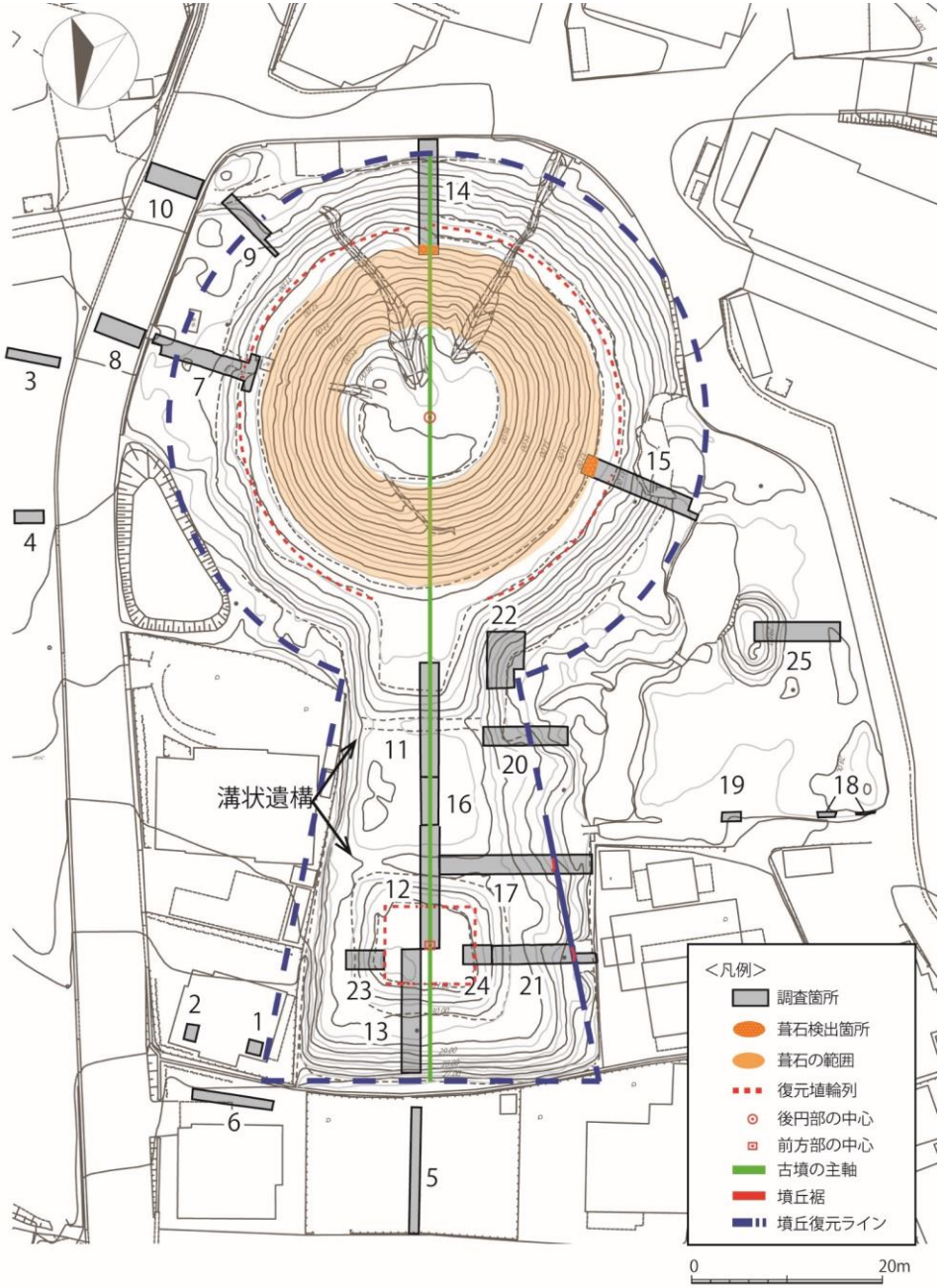
→出雲地域とは受容のあり方が異なる

より直接的な関係による受容の可能性

浜田市周布古墳（74m）



益田市大元１号墳（88m）



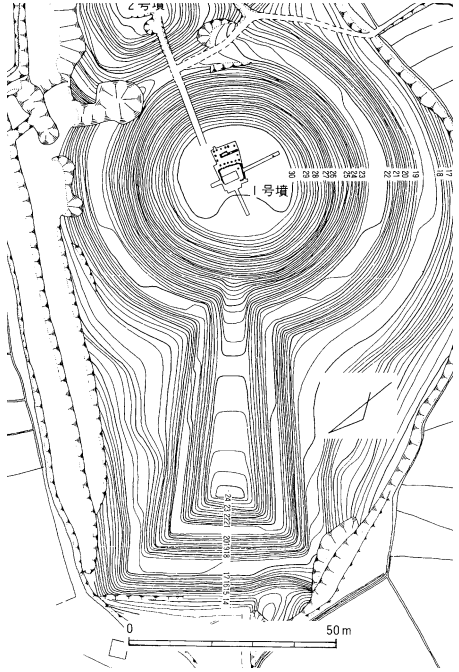
益田市スクモ塚古墳（96m）

●丹後半島の日本海三大古墳

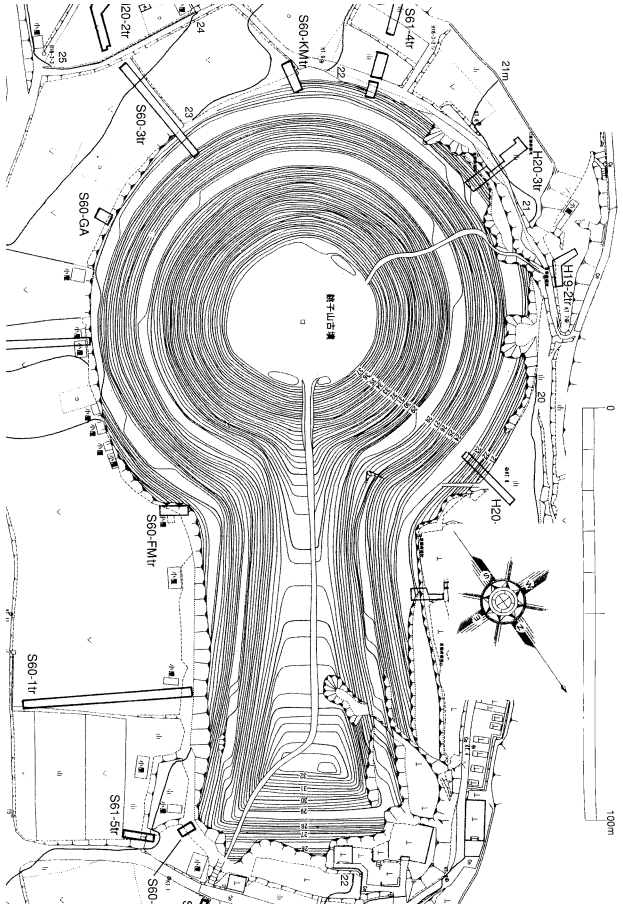
丹後半島に集約的に築造される日本海三大古墳の築造時期は、

北近畿～山陰における前方後円墳の導入と継続的築造と動向を同じくする

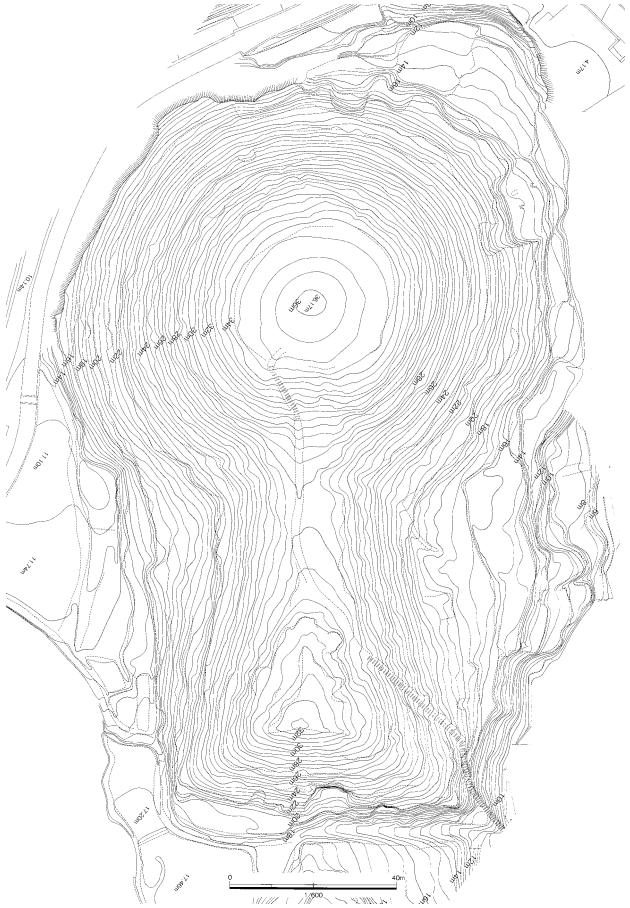
そこに共通した社会背景の存在を想定できる（丹後型円筒埴輪は伯耆以西にはないが）



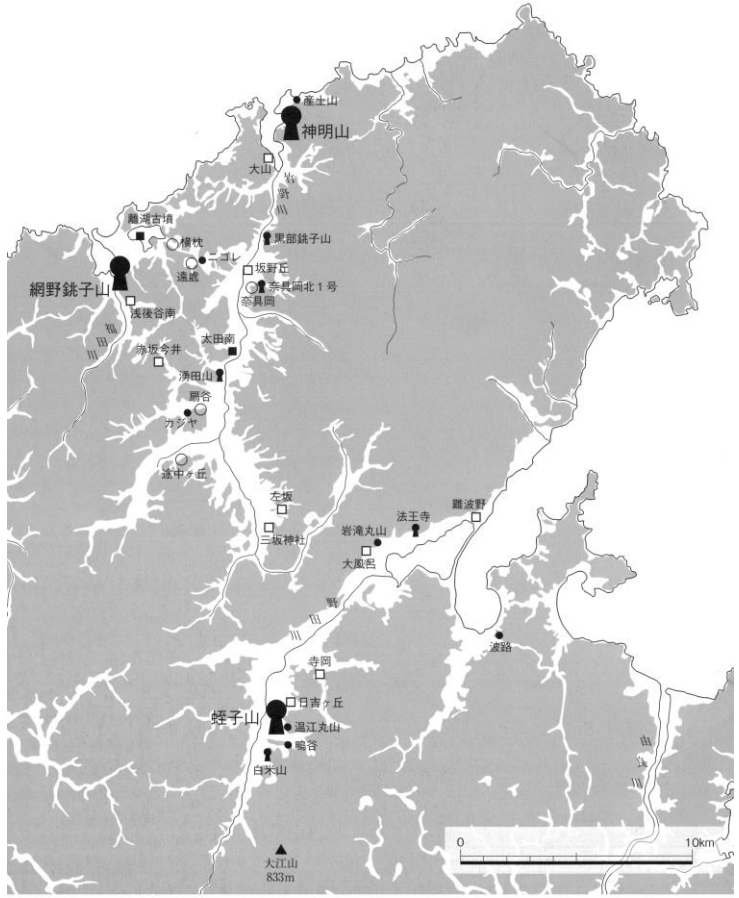
蛭子山１号墳（145m）



網野銚子山古墳（201m）



神明山古墳（約200m）

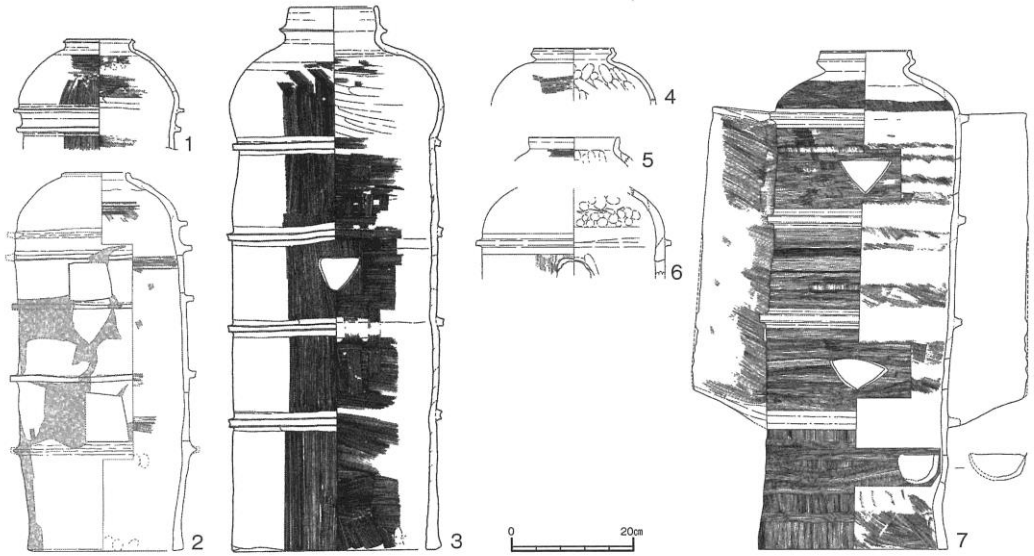


［各報告書、大阪市立大学日本史研究室2012『神明山古墳の測量調査』住考研リーフレットNo.4より］

●埴輪にみる交流

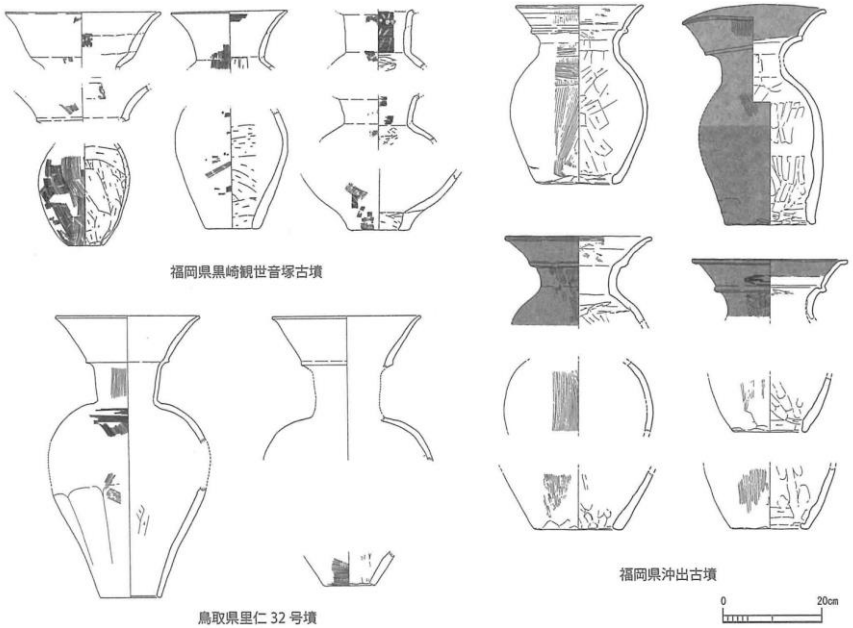
［出典のない図は報告書より］

山陰における円筒埴輪の導入は
　前方後円墳の継続的築造の嚆矢とリンク
そこには九州～山陰～北近畿におよぶ
　交流の複雑かつ広域的なネットワーク形成が
　　垣間見える（モザイク的な関係性が重層）
前方後円墳の出現にはこの交流ネットワークの
　　成立が大きく関係した

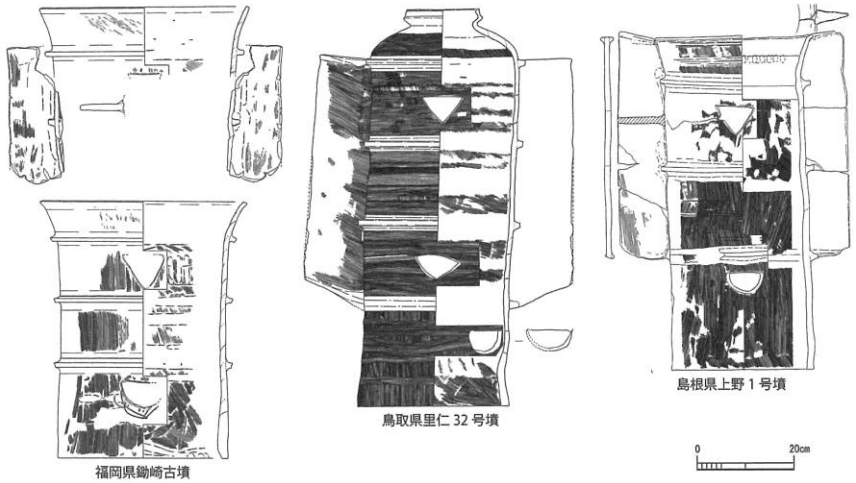


1.六部山46号墳　2.六部山3号墳　3.六部山45号墳　4～6.古郡家1号墳　7.里仁32号墳

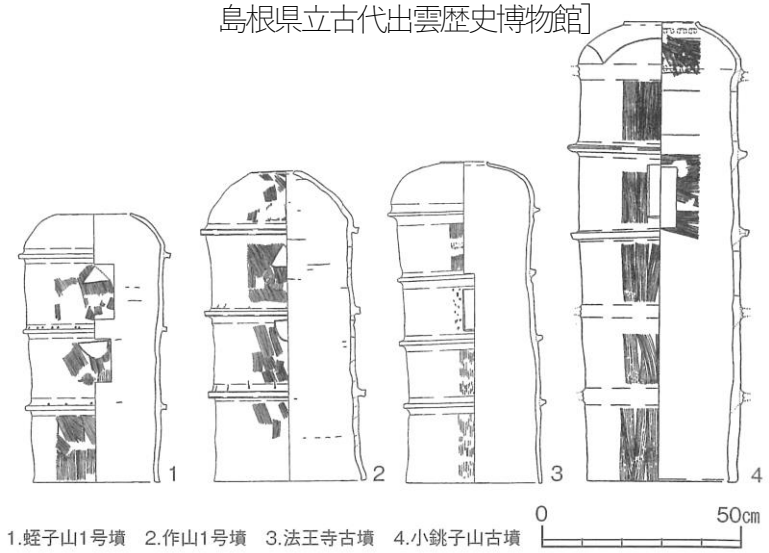
因幡型円筒埴輪［東方仁史2014「埴輪からみた日本海沿岸の地域間関係」『倭の五王と出雲豪族』島根県立古代出雲歴史博物館］



壺形埴輪にみる東西交流



円筒埴輪にみる東西交流



1.蛭子山1号墳　2.作山1号墳　3.法王寺古墳　4.小銚子山古墳

丹後型円筒埴輪［東方仁史2014「埴輪からみた日本海沿岸の地域間関係」『倭の五王と出雲豪族』島根県立古代出雲歴史博物館］

●出雲における玉生産の本格化

玉湯地域の花仙山産の碧玉・瑪瑙石材の製品が前期末ごろより列島広域に波及

近畿中央部の有力古墳においても副葬品として出土

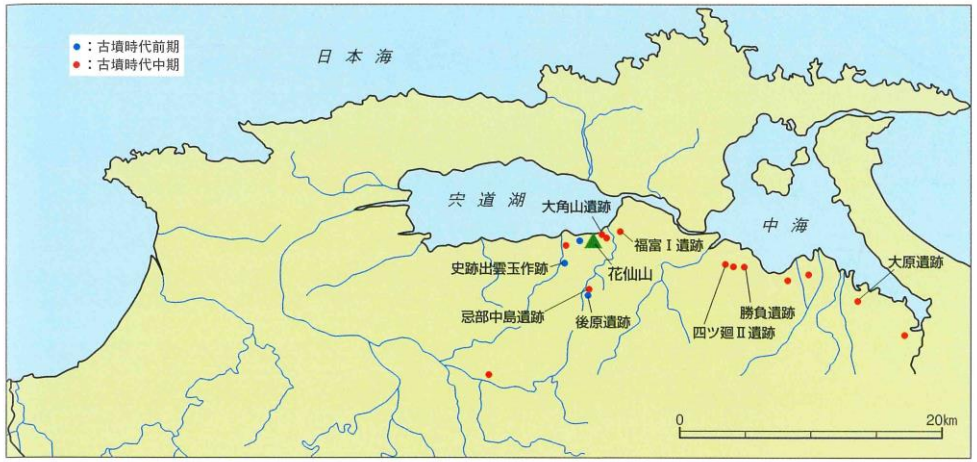
（韓半島・金官加耶の有力古墳からも副葬品として出土）

→玉湯地域でも同時期の玉生産遺跡が存在＆室山１号墳の築造

→東アジア規模におよぶ交流のなかで王権と出雲の関係性に大きく変化

奈良県新沢500号墳 ［奈良県立橿原考古学研究所附属博物館ほか編2000『大古墳展』東京新聞］

島根県上野１号墳 ［島根県立古代出雲歴史博物館2014『倭の五王と出雲豪族　ヤマト王権を支えた出雲』］



56 古墳時代前・中期の玉作り遺跡

古墳時代前期になると、弥生時代までみられた宍道湖・中海沿岸部の玉作遺跡が姿を消し、花仙山産周辺地域に３遺跡が集まる。そして中期には再び中海南岸域や山間部に玉作りが拡大する。

古墳前期の出雲玉作の様相

［島根県立古代出雲歴史博物館2009『輝く出雲ブランド　古代出雲の玉作り』］

古墳前期末頃に始動する花仙山産石材の玉類の生産遺跡は玉湯地域に集中分布

●韓半島にもたらされた花仙山産石材製品

韓半島出土の花仙山産石材製品は玉類ではない

　玉類以外の石製品に花仙山産石材が使用される

玉類以外の花仙山産石製品は必ずしも出雲産なわけではない

→石材を近畿地方に供給し、製品が製作された可能性もある

その場合、

　花仙山産石材製品は

　出雲と韓半島をつな

　ぐ考古学的な根拠と

　はならず、

　王権からは石材供給地

　として出雲が位置づけ

　られたことになる。

→原材料供給源としての評価

京都府園部垣内古墳出土品（南丹市所蔵）

［島根県立古代出雲歴史博物館2014『倭の五王と出雲豪族　ヤマト王権を支えた出雲』］

韓国・金海大成洞108号墳の石製品

［大成洞古墳群博物館2022『多種多様多彩大成洞108号墳』博物館学術叢書第25冊］

●花仙山産石材の玉類生産と流通にみる重層性

出雲ブランドと称される花仙山産石材製品

出雲では小規模墳でも

まとまった量の出土例あり

他地域ではこうした状況は

みられない

中期初頭～前半に継続的

に築造されたとみられる

松江市櫨岡古墳群では、

古墳群内で花仙山産石材

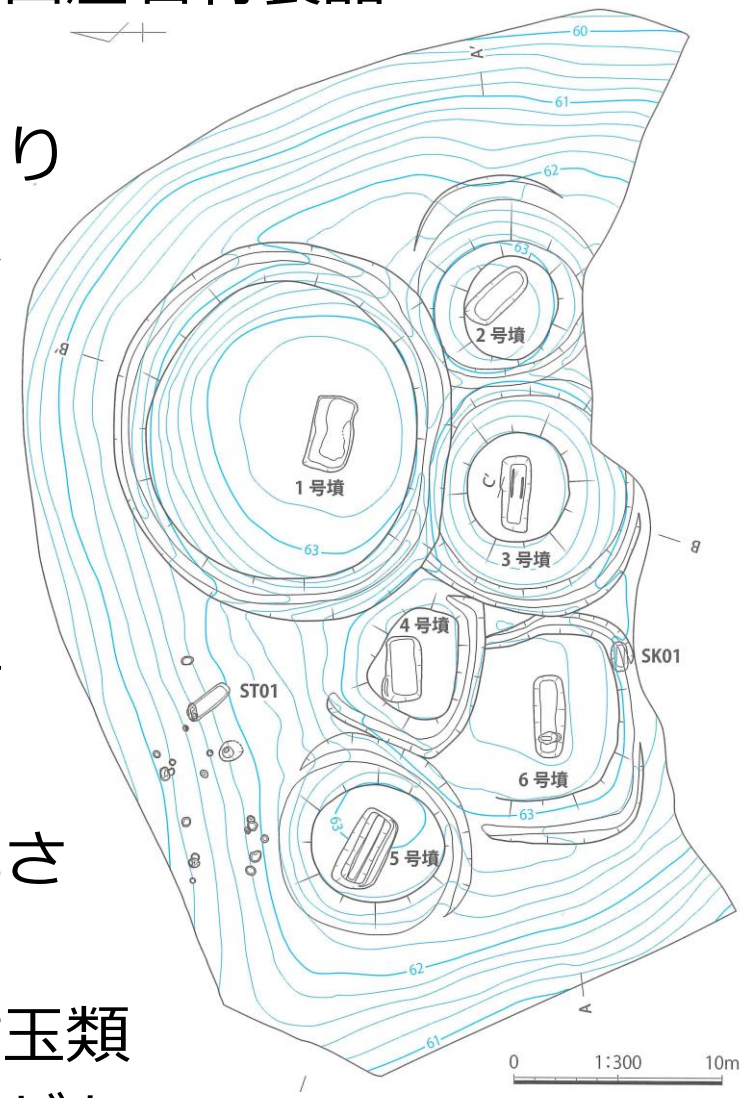
の玉類がある程度まとま

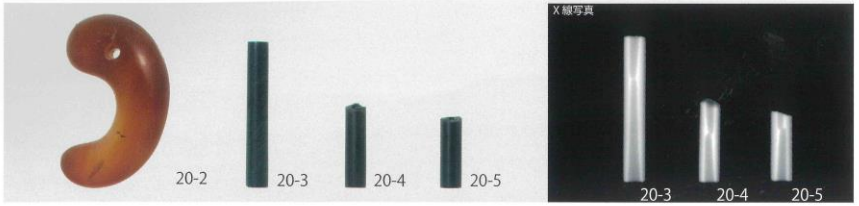
って保有され、分割副葬さ

れた可能性がある。

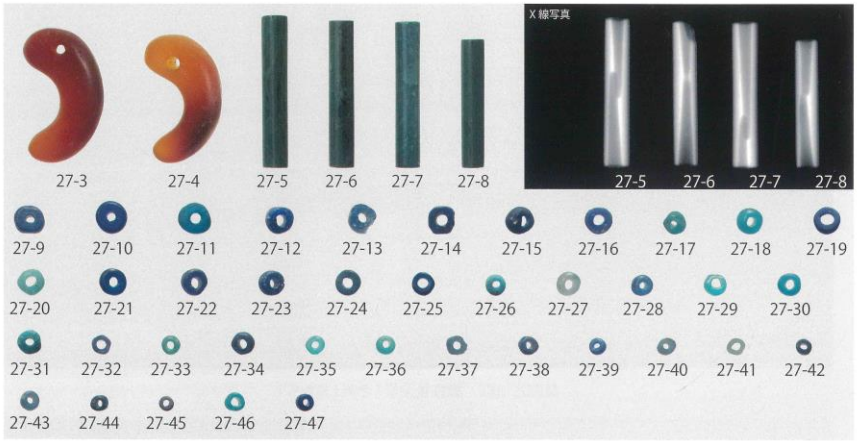
→地域社会内で花仙山産石材玉類

が入手可能であった可能性がある

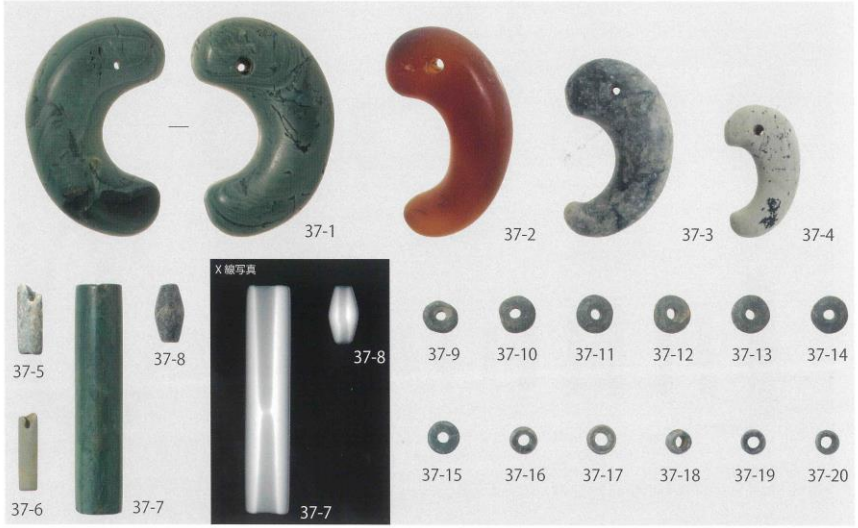




櫨岡古墳群　1号墳出土遺物



櫨岡古墳群　3号墳出土遺物



櫨岡古墳群　6号墳出土遺物

櫨岡古墳群（松江市東津田町・山代町）と出土玉類[報告書より]

●山陰における前方後円墳の築造と４世紀の社会

山陰での前方後円墳の導入は大きく二つのリズム

①前期中葉～後半　→　前方後方墳を含めて多様な交流のチャンネルが背景

②前期末～中期初頭　→　前方後円墳にみる規模の拡大・埴輪の採用率増加

（４世紀後半）　より直接的な王権との関係性が構築された可能性

出雲の玉生産とリンク？

【既往の理解】

４世紀後半の東アジア情勢の変化

→４世紀後半に山陰をネットワークに

含めた「博多湾貿易」の解体［久住2007］

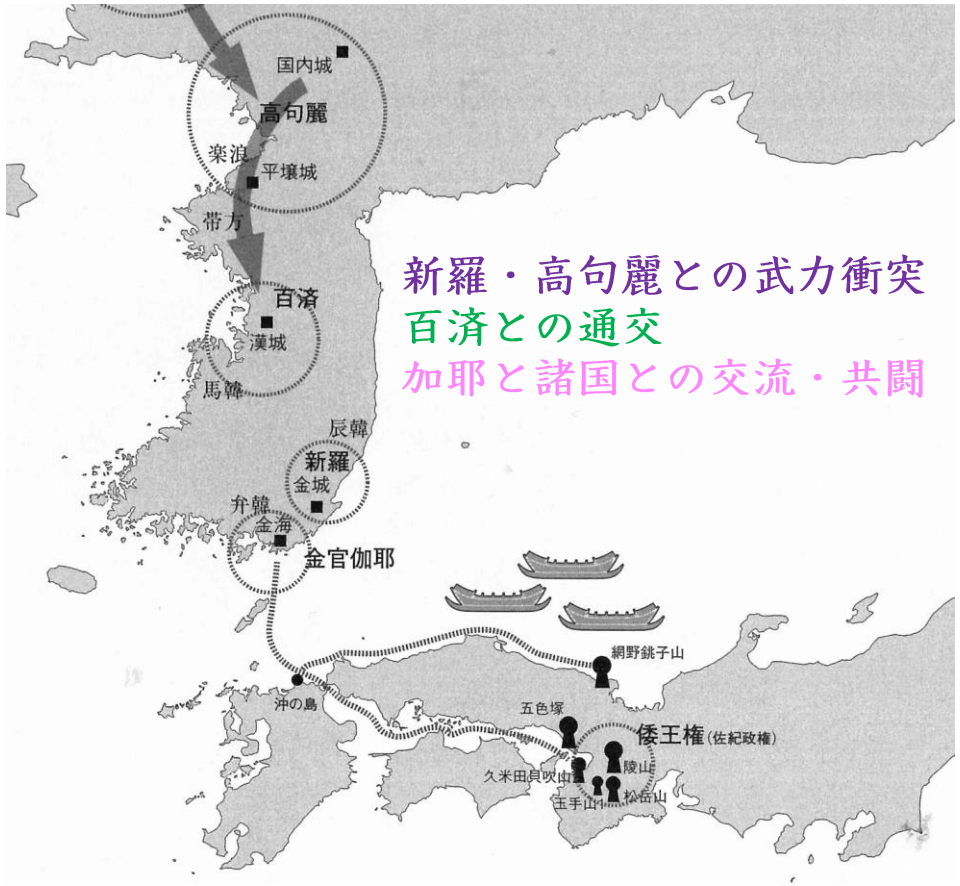
→倭王権による対韓半島交渉の成立にともなう

交易ルートの直接的掌握［杉井2005］

◉しかし、出雲の円形原理墳の様相には、地域的な選択もうかがわれ、倭王権による直接的な掌握を想定しうるほどの考古学的根拠はない

日本海交流の相対的な重要度が王権目線で高まった点は疑いないが、在地の主体性も存在

（埴輪にみる様相からは従前の地域間交流もなお継続）



４世紀の東アジアと倭の対外関係

［岸本直文2010「渋谷向山古墳と佐紀古墳群」『玉手山１号墳の研究』大阪市立大学日本史研究室］

●近畿中央部での佐紀古墳群の卓越

出雲地域を含めた山陰エリアで前方後円墳がまとまって築造される
前期末～中期初頭

→近畿中央部では王陵級古墳の築造場所が奈良盆地東南部から
奈良盆地北部の佐紀古墳群へとシフト

◉近畿中央部における大型前方後円墳の動向と山陰あるいは
出雲の動向は無関係ではない

◎大型方墳築造→前方後円墳導入の変化の背景には、
近畿の古墳築造動態とそれにかかわる社会変化の
影響が想定される

5．まとめ

●**古墳時代開始段階における大型古墳築造の二つの画期**
大型方墳の築造開始と前方後円墳の継続的築造

●**大型方墳の築造と「再生された四隅突出型墳丘墓」**
出雲における大型古墳の築造の嚆矢は、前方後円墳ではなく、列島最大級の方墳
大型方墳は四隅突出型墳丘墓を「復古再生」したもの
→古墳築造においては、地域社会の正統性が先進的な前方後円墳より重視された

●**前方後円墳築造開始とその背景**
出雲での前方後円墳の築造開始は、西日本の日本海沿岸部の諸地域と様相が共通
→倭王権を中心とした社会関係の変化を反映した動き
（出雲では大型方墳の非築造エリアに前方後円墳が導入される排他性もある）
古墳築造技術の再現性の高さから、「上番」による中心・周辺関係が安定した可能性も
山陰を俯瞰すると、前方後円墳築造が複数のエリアで継続するようになる
→地域社会の拠点形成が前方後円墳の築造によって広域波及したことを示唆

◉**大型古墳の継続的築造は倭王権との直接的関係の形成を反映したものと評価できる**
築造背景に**倭王権との関係性（先進性）**や**地域社会での正統性**など複合的要因が作用
考古学的事実からは、出雲は他地域に比べて地域社会での正統性が重視された

【参考文献】
赤澤秀則1999「出雲地方前期古墳の系譜と階層性」『地域に根ざして』田中義昭先生退官記念文集　田中義昭先生退官記念事業会
池淵俊一1997「大形方墳は何を意味するのか―前方後円墳体制下の出雲―」『古代出雲文化展―神々の国　悠久の遺産―』島根県教育委員会
池淵俊一2017『古墳時代史にみる古代出雲成立の起源』松江市ふるさと文庫　松江市
岩本　崇2010「古墳時代前期における地域間関係の展開とその特質」『龍子三ツ塚古墳群の研究』大手前大学史学研究所
岩本　崇2016「山陰の前期古墳―前方後円墳と前方後方墳―」『考古学ジャーナル』No.681
岩本　崇2017「再生された四隅突出型墳丘墓」『考古学研究』64-1
上田宏範1969『前方後円墳』学生社
内田律雄・曳野律夫・松本岩雄2024「松江市室山古墳群墳丘測量報告（上）―室山１号墳―」『島根考古学会誌』41
大阪市立大学日本史研究室2012『神明山古墳の測量調査』住考研リーフレットNo.4
大谷晃二2011「山陰」『講座日本の考古学　古墳時代　上』青木書店
岸本直文1992「前方後円墳築造規格の系列」『考古学研究』39-2
岸本直文2010「渋谷向山古墳と佐紀古墳群」『玉手山１号墳の研究』大阪市立大学日本史研究室
岸本直文2020『倭王権と前方後円墳』塙書房
久住猛雄2007「「博多湾貿易」の成立と解体」『考古学研究』53-4
椚　国男1975『古墳の設計』築地書館
近藤義郎1977「古墳以前の墳丘墓―楯築遺跡をめぐって―」『岡山大学法文学部学術紀要』第37号（史学篇）岡山大学法文学部
近藤義郎1983『前方後円墳の時代』岩波書店
澤田秀実2017『前方後円墳秩序の成立と展開』同成社
島根県立古代出雲歴史博物館2009『輝く出雲ブランド　古代出雲の玉作り』
島根県立古代出雲歴史博物館2014 『倭の五王と出雲豪族　ヤマト王権を支えた出雲』島根県立古代出雲歴史博物館
杉井　健2005「中央政権の外交政策と渡来人」『九州における渡来人の受容と展開』九州前方後円墳研究会
大成洞古墳群博物館2022『多種多様多彩大成洞108号墳』博物館学術叢書第25冊
高槻市立しろあと歴史館2006『三島古墳群の成立―初期ヤマト政権と淀川―』
都出比呂志1989「古墳が造られた時代」『古墳時代の王と民衆』古代史復元６　講談社
都出比呂志1991「日本古代の国家形成論序説―前方後円墳体制の提唱―」『日本史研究』第343号　日本史研究会
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館・京都大学・東京新聞編2000『大古墳展』東京新聞
新納　泉1989「王と王の交渉」『古墳時代の王と民衆』古代史復元６　講談社
東方仁史2014「埴輪からみた日本海沿岸の地域間関係」『倭の五王と出雲豪族　ヤマト王権を支えた出雲』島根県立古代出雲歴史博物館
廣瀬　覚2015『古代王権の形成と埴輪生産』同成社
藤田憲司2006「神原神社古墳と山陰の前方後円墳時代初期墳丘墓」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター
北條芳隆1999「讃岐型前方後円墳の成立」『国家形成期の考古学―大阪大学考古学研究室10周年記念論集―』大阪大学考古学研究室
北條芳隆2000「前方後円墳と倭王権」『古墳時代像を見なおす―成立過程と社会変革―』青木書店
前島巳基1973「出雲における古墳文化の生成」『季刊文化財』第18号　島根県文化財愛護協会
松山智弘2002「出雲における墳墓の変遷」『神原神社古墳』島根県加茂町教育委員会
山本　清1951「出雲国における方形墳と前方後方墳について」『島根大学論集』第1号（人文科学）　島根大学
和田晴吾1981「向日市五塚原古墳の測量調査より」『王陵の比較研究』京都大学文学部考古学研究室
渡辺貞幸1986「古代出雲の栄光と挫折」『王権の争奪』日本古代史④　集英社

【報告書等】
出雲市・出雲市教育委員会2011『史跡西谷墳墓群整備事業報告書』
大牟田市教育委員会1999『黒崎観世音塚古墳』
岡林孝作・東影悠2024『桜井茶臼山古墳の研究―再発掘調査と出土遺物再整理―』奈良県立橿原考古学研究所
加悦町教育委員会1992『史跡蛭子山・作山古墳整備事業報告書』
嘉麻市教育委員会2017『沖出古墳２』
京丹後市教育委員会2024『網野銚子山古墳　整備事業に伴う発掘調査２』
建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会1995『塩津山１号墳』
島根県教育委員会2001『上野遺跡・竹ノ崎遺跡』
島根県教育委員会2018『上竹矢7号墳・東百塚山古墳群・古天神古墳･安部谷古墳群調査報告書』
島根県教育委員会2023『五反田古墳群・門生黒谷Ⅲ遺跡』
島根県教育庁古代文化センター2004『松江市東部における古墳の調査』
島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター2005『大寺1号墳発掘調査報告書』
島根大学考古学研究室・出雲弥生の森博物館2015『西谷３号墓発掘調査報告書』
島根大学考古学研究室・安来市教育委員会1999『島根県安来市　大成古墳第４・５次発掘調査報告書』
鳥取県教育委員会2010『本高古墳群』
鳥取県教育文化財団1985『里仁古墳群 32・33・34・35号墳の調査』
浜田市教育委員会2008『史跡　周布古墳　蔵地宅後古墳　市史跡　金田1号墳』
福岡市教育委員会2001『鋤崎古墳群３』
益田市教育委員会1987『益田市遠田地区遺跡分布調査報告書　1』
益田市教育委員会2024『スクモ塚古墳』
松江市・松江市スポーツ・文化振興財団2023『櫨岡古墳群・南外古墳群・奥宇田瀬遺跡・岩井手谷遺跡』
安来市教育委員会1980『安来市の遺跡調査報告1』
安来市教育委員会1999『荒島古墳群発掘調査報告書』

【ホームページリンク等】
東京国立博物館研究情報アーカイブス　https://webarchives.tnm.jp/